

卒業論文

在日コリアンの過去・現在・未来

都市形成過程におけるマイノリティ・コミュニティの役割

1 c 0 0 0 8 0 9 - 1

早稲田大学第一文学部

総合人文学科 社会学専修 4年

鶴山 芳美

序章 テーマ設定の動機 ~なぜ、「長田の在日コリアン」なのか

<「在日コリアン」の呼称について>

本論文では、朝鮮半島をルーツとする人々、あるいはそのような人々を祖先とし、現在、日本に暮らす人々を、日本籍（帰化）・韓国（大韓民国）籍・北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）籍の区別はせず、戦前までの歴史をメインとした第1章では、表記を「朝鮮人」で一括し、戦後の歴史をメインに展開する第2章以降では、朝鮮半島の南北分断や、個人による国籍の変更や選択がなされている現在の社会状況を鑑み、「在日コリアン」と総称することを、まず初めに、ここに定義しておきたい。

執筆にあたって

この卒業論文を執筆するにあたり、私は、まず初めに、なぜ「在日コリアンコミュニティ」の形成と実態に関心を抱いたのか、そしてなぜ、本論文での研究対象として、神戸市長田区の在日コリアンを選んだのか、その動機と理由を明確にしたいと考えた。

歴史における、日本と朝鮮半島の国家 韓国・北朝鮮 間の問題は、本論文中で詳しく挙げるのが困難であるほど、非常に複雑なものである。特に1910年、日本によって行われた「韓国併合」は、のちの在日コリアンの大きなルーツとなっており、本論文でも避けては通れない史実である。その歴史観、責任問題をめぐり、現在でも日朝間における言論の争いは絶えない。戦時中の創始改名や強制連行、従軍慰安婦問題に始まり、現在にまで至る民族差別まで、問題は挙げればきりが無い。さらに最近では、北朝鮮の拉致問題に荷担したという疑惑まで持ち上がる彼らである。日本で長年、「在日韓国・朝鮮人」の問題がタブー視されてきたのも、こうした山積みの問題を背景としてきたためである。

国家や文化レベルでの日本と朝鮮半島の親交は、遥かに昔から続いているものである。最近では、韓国という国家に限っていえば、ドラマや映画、音楽が互いの国で人気となり、2002年のワールドカップのように、両国が友好的に文化交流を進めているともいえる。しかし、近代に日本に渡って来た朝鮮人、あるいはその子孫たちに対しては、差別的な見方をする風潮がいまだに根強く日本社会の中に残っているように思われる。「在日」という漢字2文字を入力してインターネットで検索すれば、差別や蔑視の感情に満ちた匿名掲示板の書き込みが次々に現れる。しかし、率直に述べると、私は、本論文において、在日コリアンに対し現在日本で起こっている差別問題を告発して彼らの人権を訴えたり、日朝間の歴史に対する個人的な見方を論じたりしようとは考えていない。史実や社会風潮に対する感情は、調査先で出会った在日コリアンの人々、あるいはそれに対する「日本人」(*1)の考えを「聞き書き」する程度に留めたい。私があくまで本論文中で追ってゆきたいのは、近代以降の「在日コリアンの人々が日本の都市形成に与えた影響」と、その歩みである。しかし、できるだけ視座を在日コリアン、すなわち日本社会におけるマイノリティの立場に近づけるため、日本で生きてゆくにあたり、彼らの生活を阻害した史実や法制度等につ

いては、折に触れて説明してゆきたい。

マイノリティが地域形成に与える影響

歴史の教科書を見てもわかる通り、日本の社会や歴史は、「日本人」という単一民族のみによって築かれたものではない。「日本人」以外の民族の人々が社会の形成に関わる時、その行為は時折、自国を「単一民族国家」と捉えて考える風潮の強い、あるいは集団主義意識・排他意識の強い「日本人」たちによって、批判されたり差別されたりすることもあった。日本の歴史の中には、階級意識によって同じ民族が同じ民族を差別することが合法とされた時代もあった。江戸時代の「士農工商」制度と、その緩衝策として敷かれた「エタ・非人」階級である。差別する側が自分たちを「マジョリティ（多数派）」として捉えるならば、「日本人」以外の民族、あるいは差別を受ける階級の「日本人」は、「マイノリティ（少数派）」となる。「日本人」は、何かと多数派の自分たちのみで社会を形成してきたと考える傾向がある。自分たちの生きる、自分たちの暮らす社会や地域は、当たり前のように「日本人」、すなわちマジョリティによって形成され、発展してきたものとする傾向がある。排他された人々は、マジョリティたちから、あたかも彼らが、地域社会の形成に関わる資格を与えられていないかのような見方をされる。そして、一般的には好まれない仕事を押し付けられる。江戸時代、被差別階級の人々は、糞尿の汲み取りや牛馬の屠殺、死刑の執行役や火葬を生業として生きざるを得なかった。植民地時代、日本に渡来したコリアンたちは、日本の近代化を支えるべく、肉体労働に駆り出された。現在でさえ、来日した外国人の携わる仕事は、製造業や建設業など、過酷な労働を強いるものも多い。しかし、彼らの仕事は社会に欠かせなかった。地域社会を周縁部で支えることで、マイノリティたちは社会の潤滑油的な役割を担ってきた。近代日本の、特に都市部において、その地域の性格とりわけ、産業やコミュニティの在り方について を形成する重大な要素となったのは、「マイノリティ」と呼ばれる人々の存在であったのではないか。「周縁部を支えた」マイノリティの歴史を調べることによってこそ、地域社会の輪郭がはっきりしてくるのではないだろうか。

都市の周縁部には、そうしたマイノリティたちが集まっていた。決して彼らの意図するところではなく、歴史の必然性や、マジョリティの社会による恣意によって、マイノリティたちは、その地域のまちづくりに関わっていた。気がつくとも、マイノリティ自身が地域社会形成の担い手となっていた。貧しさや出自によって社会の周縁部に追いやられ、そこで生活を始めた人たち。そんな彼らの支えた産業が、いまやまちの主幹産業となった地域がある。また、地域の復興のために、それまで差別されていたマイノリティたちが、舵取り役として俄かに注目を集めた地域がある。そのひとつが、本論文で研究対象として取り上げる、神戸市長田区である。

「オールドカマー」の集住地区

神戸市長田区は、日本有数の在日コリアンの集住地域である。

近年、全国的に新たに韓国・朝鮮籍の外国人が増加しており、東京都新宿区大久保などは、留学や就労のために来日する「ニューカマー」のコリアンたちの増加が著しい、新しい「コリアタウン」として知られている。しかし、本論文でスポットを当てるコリアンは、日本社会の中で数世代にもわたって生活を営んできた、いわゆる「オールドカマー」 - 1910年（明治43年）の「韓国併合」前後に来日したコリアンとその子孫 - である。長田で暮らすコリアンたちの大半は、そうしたオールドカマーの人々である。

また、長田区については、やはり1995年（平成7年）の阪神・淡路大震災による人口激減を考慮し、「オールドカマー」の集住地区としての長田の姿を考察する資料として、ここで、少し前の統計を参考されたい。

昭和55年度（1980年）法務省入国管理局統計によると、大都市区部における（市を含まない）韓国・朝鮮籍の住民人口は、長田区は11,443人と、大阪市生野区の38,898人に次いで全国第2位となっている。但し、全外国人人口に対する韓国・朝鮮籍の住民人口の割合は、長田区は96.3%で京都市伏見区と並び第10位とそれほど順位は高くない。この当時から、長田区には在日コリアン以外にも、ベトナム人など、アジア系を中心に様々な国籍の外国人が暮らしていたと考えられる。

日本で在日コリアンが多く居住していることで知られる都市には、大阪市（生野区や東成区、西成区）やそれに次ぐ兵庫県尼崎市、また関東では川崎市や横浜市、東京都足立区、荒川区がある。

「マイノリティの寄せ場」に見られる共通点とは

これらの地域には、いくつかの共通点がある。第一に、戦前からの工業都市であったことが挙げられる。これらの地域は主に製造業を主幹産業として栄え、特に、高度経済成長期にはめざましい産業発展を遂げた。第二に、被差別部落やスラムを抱えていた町であること。それは、職を求め、生活を求めて各地から様々な境遇の人々が集まった場所であるということの意味する。つまり、これらの地域には、日本社会で「マイノリティ」として扱われている人々が集住していたのである。私は、そんな「マイノリティ」として扱われる人々が、いかに地域社会に影響を与えてきたのか、その歴史と、今後の地域社会における彼らの可能性を、「在日コリアン」というひとつのモデルを通して、考察してみたいと思った。

長田は、マイノリティの集まる町であった。長田に集まって住んでいたのは、コリアンの人々だけではない。長田には、「番町」と呼ばれる同和地区がある。また、阪神大震災が発生するまで、JR新長田駅周辺は、長屋の連なる工場町であった。その町の景観や歴史は、時に周辺地区の人々や外部の者から、差別的に語られることもあった（*2）。私自身、もしも生粋の神戸育ちであれば、本論文の研究対象に、長田という町を選ぶことはなかつ

たであろうと感じる。なぜなら、無意識のうちに長田に対する差別意識を抱いていたに違いないからである。外から来た人間であったからこそ、長田の歴史に敏感になれたのである。

私の研究の原点は、幼い頃、「よそ者」として神戸の歴史や地域事情に触れた時の「カルチャーショック」に端を発している。

長田に対する関心の「原点」

私が在日コリアンコミュニティの形成と実態に関心を持ち始めたのは、父の仕事の関係で、横浜市から神戸市へ転居した小学校5年生の頃まで遡る。

転校当時、私は関西弁をうまく操れず、言葉遣いを級友にからかわれていた。しかも、生意気な性格もあいまって、クラスメイトたちから非難を浴びることがしばしばあった。その時流れたのが、「鶴山さんは韓国人らしい」との噂である。私は、何を根拠に「韓国人」に疑われるのかと、怒ったり傷ついたりする以前に、仰天した。そして、その噂は私にとって到底理解できない、不可解なものであった。その後、私は、神戸市内には在日コリアンが多数居住していることを知る。私の住んでいた横浜も外国人人口の多い町として知られているため、「あいつもそう（「韓国人」）や」と“叩かれた”ようであった。「韓国人」は、よそ者への差別語として向けられたものだったのである。それと同時に、暗にそのような人間への差別がこの街に存在し、子どもにまでそれが浸透していることを知って、怖くなったことをよく覚えている。私が引っ越したのは神戸市須磨区であったが、母が「この土地の人はお隣の長田区のことを随分悪く言うのよ、下町で卑しい町だ、あそこには昔朝鮮の人が多く住んで、被差別部落もある、とか。そういうことを平気で口にできるのは、昔から差別が当たり前にあるってということなのかしら」と口にするのを聞き、差別意識は、両親や祖父母の言葉や思考に影響されて植えつけられるのだろうか、と感じた。私が長田区に関心を持ち始めたのはその頃からであった。「在日韓国人（あるいは朝鮮人）」という言葉も「被差別部落」という言葉も、生まれ育った町では耳にしたことがなかった。小学校の道徳の教科書に「同和問題」（これも神戸に来てから初めて知ったものであった）なるものが取り上げられていたが、授業で触れられることは一切なかった。しかし、そのような地区が神戸に、のちに長田にもあることも知ってゆく。

私の住んでいた地域にも、在日コリアンは多く住んでいた（*3）。どのクラスにも在日コリアンの級友がいた。しかし、本名を使っていたものは誰もいなかったため（*4）、はた目にはまったくわからない。そのため彼らが在日コリアンであることを知るのは、親が井戸端会議で話しているのを子どもが小耳に挟むか家庭で聞かされるか、あるいは、コリアンの級友が堂々と自分の国籍を話すか、そのどちらかであった。だが、彼らの国籍を理由に差別をしたり、いじめをしたりということは、まったく起こらなかった。というのも、彼らのほとんどが、成績優秀、そうでなくとも積極的な性格の持ち主で、皆から一目置かれる存在だったからである。中学で親しかった私のある友人もその一人であった。在日コ

リアン4世であった彼女は、負けず嫌いで成績優秀な、いわゆる「模範生」だった。父親は長田にあるケミカルシューズ工場の社長で、震災後は、自社工場の再建と業界の復興支援のために多忙に動き回っていた。彼女は、中学受験の失敗をコンプレックスとして抱えていた。小学校時代、教育熱心な親の元で一生懸命に勉強し、厳しい指導で知られる地元の進学塾にも通っていた。ところが、「絶対受かる」と塾で太鼓判を押され、本人もそれを確信していた私立の名門中学校受験は、不合格に終わった。彼女はそれを、「うちが韓国人やから落とされたんや」(*5)と悔しそうに語っていた。その悔しい体験と、「国籍のハンディを埋めるくらいに頑張っ、日本人を見返してやりたい」というハングリー精神が、彼女の「負けん気」の原動力となっていたのであろう。

彼女の生き方や体験談は、当時の私に大きなインパクトを与えた。神戸に、彼女の「同胞」がたくさん存在すること。ケミカルシューズ産業に携わる人の多くが在日コリアンであること。初めて知ることばかりであり、またどうしてそうなのか、私には分からないことばかりであった。なぜ、靴業界に在日コリアンの人が多いのか、そもそも長田に在日コリアンの人が多いのはなぜなのか、そんな素朴な疑問が次から次へと生まれた。もっと多くの人に出会って長田を知ってゆきたいという思いもこの時期に芽生えた。長田区にある高校に進学したことも、関心をさらに深める大きな動機となった。長田育ちの高校の友人に誘われて、区内で震災復興関連や福祉関連のボランティアを手伝うようになり、長田の町の人々との交流の機会も増えた。そして、長田はなぜ「下町」と呼ばれるのか、長田にはなぜ商店街や工場が多いのか、なぜ長田の人口密度は神戸で一番高いのか…。長田の町の構造や歴史そのものに対する興味が次々と湧いた。しかし、町の歴史とコリアンの集住の接点は、「長田の町を楽しむこと」に熱中していた私にとって、結局、3年間見えずじまいであった。というより、勇気がなくて踏み込めなかったというのが正直な感想だろう。

「知らないこと」が差別を生む

大学1年の時、阪神大震災からの産業復興をめぐる問題を調べるため、私は、高校時代を過ごした長田区へ帰郷し、ケミカルシューズ工場を経営するA氏の元を訪れた。ケミカルシューズ業界と長田の町の復興のため精力的に活動するA氏に話を伺ううち、彼の「在日コリアン2世」としてのルーツに話が及んだ。彼は、長田の地元住民の間に根強く存在するコリアンへの差別意識について触れ、このように話した。

「お互いを知らないことが、差別を生んだるんです」(*6)

彼のこの一言が、私の心を強く打った。深く知りたいと思うことが、逆に彼らへの差別となるのではないかと、そんな恐れから踏み込めなかった彼らの歴史や生き方を、少しでも知ることができれば、そう考えた。勇気を出し、私は彼に、なぜ長田にコリアンが多く住むようになったのか、また今までにどのような経緯があり、どのような問題が起こったのか、以前から興味を持っていた、だから是非その話をもっと聞かせてほしい、と頼んだ。彼はこう言った。「話すすと長くなるし、あんたにはちょっと難しい話やなあ。せやけど、話

してあげたいことは山ほどあるし、そういう歴史認識がこの街の人に足らんとこでもあるから、あんたみたいに興味をもってくれる人がおるんは嬉しいことや」

また、こんなこともあった。昨年、東京都荒川区におけるまちづくり活動の調査をしていた時、日暮里駅前の商店街で親睦会の会長を務めている B 氏にお会いした。駅前再開発に関する問題や活動状況を詳しく伺うはずが、B 氏が「この並びの向こうの通りには、朝鮮人の子孫が多く経営する貴金属の工場がいっぱいあって、『金属通り』って昔から呼ばれるんだ」と話したことをきっかけに、気が付くと話の中心は「日暮里における『在日コリアン社会』」になっていた。現在の荒川区東日暮里 3 丁目付近を中心に、戦前から「朝鮮人部落」が存在したこと、今は亡くなったが、かつて B 氏の近所で金属工場を経営し、地域の有力者として厚い信頼を集めた在日 1 世のコリアンの男性がいたこと、また、近年新たに来日するコリアンが増え、いわゆる「ニューカマー」の彼ら向けに朝鮮の食材や雑貨を売る店舗、あるいは朝鮮料理店や日本語学校が、B 氏の商店街に急増していること、印象に残っているエピソード……。面白かったのは、日暮里の土地の性質や産業の構造、在日コリアンによって担われる産業など、話を聞けば聞くほど、様々な点に、長田との共通点が見えてくるのである。2 時間ほど話し込んだあと、B 氏は、こうって朝鮮関連の話を締めくくった。「また今度、お時間がある時にお話ししましょう」(* 7)

私は、そんな両氏にこう返答した。「卒業論文の調査で、またお伺いします。その時に、ぜひお願いします。もっと、お話をお聞きしたいです」

コリアンたちの「まちにおける役目」

コリアンはいつやってきたのか。そして、どのような過程を経て、両方の町の産業や文化の担い手となっていったのか？ 私が純粋に関心を持ったのは、そんな、彼らの「町社会における位置」と「町の形成に与えた影響」の 2 点であった。在日コリアンたちが町の主産業を担い続けるこの 2 つの町は、近代から現代にかけて、朝鮮半島から渡ってきた人々、あるいはその子孫たちにより、町の形成や性格づけにかなりの影響を与えられてきたのではないだろうかとは私は考えたのである。そして長年にわたり、時に争いながらも続いてきた日本人との「共生」という点にも、私は非常に興味を持った。私が今回、卒業論文の執筆、そしてそのための調査にあたって明確にしてゆきたいのは、そんな彼らの過去と現在の「まちにおける役目」である。

地域社会の場において、マイノリティの立場は、何かとマジョリティの側から差別や偏見のまなざしを持って語られがちである。しかし私は、マジョリティ側が見失いがちな、マイノリティの「まちにおける役目」に大きな価値を見出したいのである。それが、今後のまちの発展や、マイノリティとマジョリティとの「共生」の鍵となってゆくのではないか。長田の町の発展における影の立役者が、在日コリアンたちであり、震災や不景気で活力を失った町に再び息を吹き込むのも、彼らなのではないか。そんな疑問や関心を、私は長い間心の中に抱いていた。また、長田の在日コリアンたちの生き方は、地域社会におけ

るマイノリティの生き方のひとつの「指標」となっているのではないだろうか、と考えたことも、本文を執筆する大きな動機となった。

残念ながら長田と日暮里の比較対照をしながら本文を執筆することは、時間の都合から困難になってしまったが、日暮里やその他の在日コリアンの集住地域については、本文中で、その特性や共通点に触れながらたびたび挙げてゆきたい。

「知らせる」論文を

長田において、在日コリアンたちは長く「支配」されていた。彼らが町の産業や文化の牽引役を担い始めたのは、戦後になってからのことであった。神戸に住んでいた人間として、今でもそこに、何かしらの根強い「差別」意識が存在していることを私は知っている。

長田という町に対する他区民の差別意識、優越意識がある。長田は、様々な「要因」から一括りにされて差別的なまなざしで見られている。その「要因」の一つが、長田が在日コリアンの集住地区であるということも、事実としてある。長年長田で同じ町の住民として共に暮らす日本人住民たちも、そうした他地区からの差別を受けるたび、同じ区民として在日コリアンたちに対する差別意識がたちのぼってくることもあるだろう。そうした排他意識、差別意識が、震災後、地元の在日コリアンたちが中心になって掲げ、活動した「アジアタウン構想」を妨げる一因となったのかもしれない。「あいつらとワシらを一緒にするな」という意識が、無かったとは当然言い切れないだろう。

しかし、長田の地元住民にとって、在日コリアンたちがどうしても無視できない存在であるようにも思われる。町の主幹産業であるケミカルシューズを長年支えてきたのは、コリアンの人々であった。日本人にはないバイタリティの持ち主である点も、彼らの長所である。差別や不況、震災に屈せず、彼らは長田でたくましく商売を続け、町に活気を与えてきた。朝鮮料理の物産店が商店街に集まっていたり、朝鮮文化を伝えるイベントが活発なのも、長田の大きな特色である。朝鮮文化に対し、住民が自然になじんでいる雰囲気がある。区民は「長田マダン」などのイベントを通じ、キムチやビビンバ、焼肉、冷麺などの食べ物はもちろん、チャンゴやパンソリといった朝鮮の伝統芸能もよく知っている。

つまり、「在日コリアン」の存在は、長田の町のアイデンティティにおける大きな骨組みのひとつを担っているといえるのではないか。ゆえに彼らを「外国人」として露骨に差別できない風潮、一目置く風潮が、古くからのコリアン集住地区であった長田においてはあのようなようだ。在日コリアンの1世や2世たちが、戦前から高度経済成長期にかけての激動の時代を、日本人社会に解けこんで、というより、時に介入し、頭を使い、そして自己主張しながら、日本人社会の中でたくましく生きてきた、その影響であろう。そうした彼らの生き方を、「共生」と「独立」の両極を軸として追いながら調査したいと私は考えている。日本に住まい、歴史をどのように認識し、自分たちが地域社会においてどのような位置・役割にいると考えるか、そんな彼らのアイデンティティの輪郭をはっきりさせ、町のなかでうやむやにされがちな彼らの存在を「知らせる」ことが、本論文の執筆における最大の

目標である。

この卒業論文が、地域社会におけるコミュニティ、ルーツを異とする民族の共生や共同でのまちづくり・産業振興について、人々に興味関心を与えられるものになってゆけばと私は願う。歴史や民族の営みが、まちの性格付けに大きな影響を与えているということ、日本のまちの発展が、一部の日本の知識人や資産家の手によってのみではなく、異民族や下級階層と呼ばれる人々によってもたらされた部分もあるということ。今まで、それを詳しく教えてくれる資料はなかなかなかった。そんな、一般的にあまり知られていない史実を証明し、意外な発見を人々にもたらしたいと、私は期待を胸に秘めている。

注：

(* 1) ここでは、その人自身の知る限りで、「日本」という国家を祖先のルーツと考え、生きる人々のことを、私自身の立場も含めて、「在日コリアン」に対する「日本人」と総称する。

(* 2) 「新長田駅から南が見事に焼けとるやろ。あの辺は再開発計画の核。長屋がひしめいたみっともないスラム街は、神戸市にとっては目の上のこぶやった。竹村健一（評論家）もここをインドのスラム街以下と言ってた。見事な焼け方や。消さんかったのや」（長田区の大火災について語った住民の言葉の一節。栗野仁雄『瓦礫の中の群像』東京経済 1995 p. 89 より）

(* 3・4) 高度経済成長期、ケミカルシューズ産業に携わる長田のコリアンたちの間には、「ケミカル（シューズ産業）で一発当てて儲けたら、（隣の区の）須磨に立派な家を建てる」ことが、業界における「成功者」のステータスとして存在していたことが、ヒアリングによって判明した。私の在日コリアンの同級生たちも、父親がケミカルシューズ関連の仕事をしていたケースが非常に多かった。詳細は第2章で取り上げたい。

(* 5) あくまで本人の主観によるもので、実際にその学校の入学試験において差別があったかどうかは定かではない。友人Aの国籍に対するコンプレックスを端的に表した言葉として引用させて頂いた。

(* 6) 2000年8月20日 A氏へのヒアリングによる。

(* 7) 2002年9月14日 B氏へのヒアリングによる。

第1章 長田地区のあゆみ

第1節 長田における地場産業の発祥

長田とは、どのような地域か

神戸市長田区は、市内中心部よりやや西側に位置する町である。(別図1「神戸市」参照)

長田区は、隣接する神戸市兵庫区とならんで、沿岸地域を中心に、大企業の下請け部品を製造する中小工場が立ち並び、阪神工業地帯の一翼を担う住工混在型の工場町として発展した。とりわけ長田区は、明治初期にはマッチ工業、後にゴム工業を地域の一大産業として発展した町であった。近代におけるゴム工業の発展が、現在、長田の基幹産業であり、日本一のシェアを誇るケミカルシューズ(合成皮革・ゴム、ビニールを素材に用いた靴)産業を生み出した。しかし、高度経済成長期以降、1971年(昭和46年)のニクソンショック、1973年(昭和48年)のオイルショックと変動相場制への移行等、日本の製造業に大きな打撃を与える出来事が相次いだ。輸出で大きな利益を得ていた長田のケミカルシューズ産業もその例に漏れず、内需転換を余儀なくされたものの、衰退に歯止めがなかなかかからなかった。地場産業の衰退は、地元商店街の衰退や町の人口減少をもたらした。いわゆる「インナーシティ問題」が発生していた。さらに、1995年(平成7年)に発生した阪神・淡路大震災により、長田区は甚大な被害を受けた。住宅と町工場が隣接しながら密集し、その人口密度は市内一であったことが、長田の被害を大きくしたと考えられる。さらに、可燃物を大量に扱うケミカルシューズ工場から出火が相次ぎ、老朽化した木造家屋の密集地であった長田の町は、瞬く間に火の海となった。市内でも最大級の被害を受けた長田は、復興にも長い時間を要した。現在の区の人口は10万4595人(平成15年8月1日現在、長田区統計による)で、震災直後に比べて回復はしているが、それでも1995年(平成7年)1月1日の人口と比べて2万5443人の減少となっている。震災の被害は、長田が近年抱えてきたインナーシティ問題をさらに深刻なものにした。地域再活性化の道を、長田は現在も模索している。以下では、「下町」としての長田の都市形成と工業の歴史を順に追ってゆきたい。

なぜ、長田で「靴産業」がおこったのか

長田地区の基幹産業であるケミカルシューズ工業は、明治期に長田で興ったゴム工業に端を発する。これは、日露戦争(1904年(明治37年)~1905年(明治38年))後に、それまで横浜港中心だった生ゴムの輸入が神戸港中心に切り替わったことが大きな動機であった。これは、日露戦争後、東南アジア方面からの生ゴムの輸入が増え、横浜港より神戸港のほうがより近く、陸揚げに至便であったためであるといわれる。また、1909年(明治42年)、イギリス資本のダンロップ護謄株式会社が、極東エリアの基盤として神戸に工場を設立したことも、神戸におけるゴム工業の発展を促した。この頃から、長

田地区にゴム工場が現れ始めるのであったが、「日本ゴム工業史 第1巻」によると、「神戸のうちでも長田・鷹取方面にゴム工場が集中したのは、その方面にしか開拓の余地がなかったこと、その方面の地価がきわめて低廉で、同地域の百姓たちが畑や水田を坪5円くらいの低廉な権利金で、あらずって貸与したことによる」とある。実は、神戸では明治後期（1909年（明治42年）～）日本でも先に例を見ない大規模な都市開発事業が実施されており、その際、対象地区の一部となったのが、現在の長田区にあたる長田村一帯であり、百姓たちの土地売りはこの事業に伴うものであった。この都市開発事業による区画整理の名残が、現在の長田区内における碁盤目のような町並みに表れている。当時の長田地区に国鉄駅が存在しなかったこともまた、土地を安くする理由の一つとなっていた。

ケミカルシューズの前身産業であるゴム靴工業は、大正時代に興った。『ながたの歴史』（長田区役所発行、1977）によると、1918年（大正7年）神港護謨工業所というゴム工場が日本で最初にゴム靴の製造に成功したという。これが飛ぶように売れたことから、長田の地でゴム靴工場を興す者が次々に現れた。1927年（昭和2年）に共和護謨製造所を設立した国頭秀治氏は、当時の様子をこのように回顧している。

「（大正後期に長田区でゴム靴工場が次々に興った様子について）サオ竹のような煙突が次々と立って行く光景を見ていた。今のような立派な鉄筋コンクリートの煙突ではなく、鉄筒の貧弱なしろものではあったが、それが1年ほどの間に何十本、何百本と林のようになった有様は見事なものであった」（兵庫県ゴム工業協同組合・兵庫ゴム工業会 1978 p.57）

これと同様の表現で、『東洋ゴム新聞』は次のように記した。

「雨後の筍と云う言葉があるが、大正8年（1919年）の末から9年一杯にわたり、いわゆるゴム靴の黄金時代に眩惑され、西神戸一帯はゴム靴工場の氾濫地帯となった。この傾向は大正10年（1921年）の初頭まで続いた結果、その頃は工場数が百十余ヶ所に及んだと言うことである。勿論その中には間借工場もあれば、借家の床を落として貼場にあてるといふ、文字通りの家族工場などもあり、これらを合算するといくつあったかちょっと見当がつかかねた」（兵庫県ゴム工業協同組合・兵庫ゴム工業会 1978 p.56）なぜ、長田が「ゴム靴工場の氾濫地帯」となったのだろうか。それには、長田が元々、マッチ工場の密集地帯であったことが大きく影響している。

マッチ工業とゴム工業のつながり

長田の地で1921年（大正10年）大坪護謨工業所を設立した大坪乙吉氏の回顧録に、次のような言葉が見られる。

「大正7年（1918年）ごろのこと、米騒動があってしばらくして、盛んであった神戸のマッチ工業が急に暇になった。そちらの方にたずさわっていた人々が、仕事や職を失って困っているところへ、たまたま、ゴム靴を作れば安くてナンボでも売れる、ゴム靴を作るには資本も少なくても人手も何人でも集まる、という人があり、事実さきにはじめた人が夜通し働いても追いつかず、ボロイ儲けをしているのを見聞きして、ゴム靴を貼るのもマッチ箱を貼るのも同じ手作業で変わるところはないはずだ、それやってみよと、多くの人々が競争するように、マッチ工場の空屋や鉄工所などではじめた。金のある者は、ゴムロールや加硫釜を取りつけてゴムの練り蒸しの仕事を始め、金のない者は自宅の床を落として作業場にしたり他の工場に間借りしてはじめるなど、あちらでもこちらでもゴム靴工場が目につくようになった。しかし、ゴムの配合がよく分からないので、満足な製品ができず、失敗を重ねた人も又多かった。私はゴムの配合を少し習っておったから、あっちこっちから頼まれてゴムの配合をして回った。文字通り引っ張りだこで、身の落ち着くいとまもなかった」（兵庫県ゴム工業協同組合・兵庫ゴム工業会 1978 p.57）

日清戦争時から第一次世界大戦時、すなわち明治中期から大正中期にかけて、マッチ工業は神戸を代表する産業のひとつであり、長田にはその工場が集積していたのである。相次ぐ戦争による好景気に日本は沸き、神戸産のマッチは日本の輸出市場を独占していた。

しかしこの勢いは、第一次世界大戦が終結した1920（大正9年）を機に急速に衰退する。マッチ工業に限らず、戦争による需要がなくなった日本のあらゆる工業が恐慌に見舞われた。第一次大戦中に異常に発達した日本の産業界は、大戦の終了とともに戦時需要が消滅し、かつ交戦諸国の生産力と供給力が回復するにしたがって、たちまち不況に見舞われ、需要の減退によって生産は過剰となり、一方、商品価格は極端に下落して、ほとんどの企業は、操業の縮小・休止あるいは廃止を行わざるを得ない事態に直面していた。とりわけマッチ工業の衰退に関しては、戦後恐慌に加え、明治末期から発生した、中国における日貨（日本製品）排斥運動の影響を強く受けるところが多かった。これに続き、それまで日本のマッチ輸出先であった中国や東南アジア諸国に現地工場が續々生まれ、各国がマッチの自給を始めたのである。そしてもう一つの理由は、世界市場独占を計画するスエーデン・マッチがトラストを組んで日本に進出してきたことであった。日本のマッチ業者は団結してこれに対抗しようとしたが、結局力及ばず、昭和に入ると日本のマッチ市場はスエーデン・マッチの支配するところとなり、神戸におけるマッチ工業も衰退の一途をたどることとなる。スエーデン・マッチ総裁であったクロイゲルの国際的な架空資金取引が明るみに出、彼が自殺を遂げた1932年（昭和7年）まで、同社のトラストは日本市場の85%を支配するに至ったといわれる。

くしくも、マッチ工業の衰退が始まったとされる1920年（大正9年）は、さきの東洋ゴム新聞中の記述にあった「ゴム靴の黄金時代」、すなわち長田がゴム靴工場の氾濫地帯となった年にあたる。造船など軍需産業に関わっていた者たちの、ゴム工業への転換も盛

んであったが、とりわけ顕著であったのが、マッチ工場のゴム工場への転換、そして、マッチ職工のゴム職工への転換である。なぜ、マッチからゴムへの業種転換が多く見られたのであろうか。それは、マッチ工業とゴム工業では、硫黄など製造に使用する材料がよく似通っていたこと、マッチ工場が防火設備の点においてすぐれており、ゴム工場への転換が容易であったこと、そしてマッチ工場もゴム工場も分業を主としており、低廉な労働力でより多くの人手を求める傾向にあったからである。

表1は、ゴム靴工業が長田でにわかに勃興した1920年（大正9年）から、1930年（昭和5年）にかけての、兵庫県におけるマッチ・ゴム労働者数の変遷をまとめたものだが、マッチ労働者の数が漸減しているのに対し、ゴム労働者の数は徐々に増えているのも、マッチ労働者のゴム工業への転換を裏付ける資料となっている。

表1 兵庫県におけるゴム・マッチ労働者数の変遷

年次	マッチ労働者			ゴム労働者		
	男	女	計	男	女	計
1920(大正9)	2710	8951	11661	2659	1587	4237
1925(大正14)	2277	7378	9655	2889	3227	6116
1930(昭和5)	1587	3997	5584	4620	5401	10021

出所：『日本ゴム工業史第1巻』

また、ゴムベルト製造会社の阪東調帯（現在のバンダー化学）の当時の会長であった雀部昌之介氏は、当時の様子をこのように回顧している。

「労働力と建物の双方の利用で、自然的に、谷に水が流れるようにマッチからゴムへ転換したような気がします。私の方（阪東調帯）には現在神戸に3つの工場がありますが、うち2つはどちらも滝川（当時のマッチ最大手・東洋憐寸の滝川一族）系のマッチ工場でした。耐火関係の問題で、ゴムに変えやすかったのです。いまの水木工場（兵庫区水木通）これは滝川さんのぢやありませんが、ハダギン（秦銀兵衛）のマッチ工場でした。それが大正6・7年（1917・18年）にまだマッチが盛んだった時代であったと思うのですが、ポンとやめてしまった。工場を増やすと、マッチの労働者は次々に移ってきた。ゴムの方が新製品・新原料としての魅力があったのでしょうか。また、硫黄を使うことはゴムもマッチも共通ですから、マッチに売り込んでいた薬品屋さんも軒並ゴムに転換したということです。いろいろの面で共通する点があったから、非常に早くゴムは伸びられた。まったくマッチさんの影響は大きかったといえます。今は神戸にはほとんどなくなりましたが、マッチ業界の人々は、いつまでも他人のような気がしません」（兵庫県ゴム工業協同組合・兵庫ゴム工業会 1978 p.98）

このようにして勃興したゴム靴工業は、第一次世界大戦終結後の不況の中で、ゴム工業

の衰微と没落を支えた。ゴム工場でも既存のゴム工場は、1920年（大正9年）恐慌の影響を受けて3割ないし5割の操短を余儀なくされたといわれている。しかしこの時期にゴム靴工業が発達したことにより、ゴム工業に限ってはその他の工業より恐慌による被害を少なくすることができたといわれる。さらに、1923年（大正12年）に関東大震災が勃発し、東京地方のゴム靴工場が一挙に壊滅したために、ゴム靴の需要が一気に兵庫県内に集中した。こうして、震災後ゴム靴の製造は、ながく兵庫県の独占するところとなった。

なお、長田において、合成皮革・合成ゴム・ビニールを素材に用いた靴、すなわち「ケミカルシューズ」が誕生するのは、戦後のことである。戦後のケミカルシューズ工業についての詳しい記述は、第2章第1節中で進めてゆきたい。

第2節 「下層社会」としての長田のあゆみ

被差別部落と長田

一大ゴム工業地帯として発展を遂げてゆく長田地区であったが、その隆盛が、安い労働力として使われてきた下層社会の人々であるということは、長田のあゆみを語る上で記しておかなければならない事項であろう。

当時の長田には、「大都市の下層社会」、すなわちスラム街としての顔があった。長田の「スラム街」としての歴史に触れずして、長田の地におけるマッチ工業やゴム工業の発展を語ることはできないだろう。スラム街であったがゆえに、長田のマッチ工業、そしてゴム工業は、低廉な労働力を容易に得ることができ、大きく発展しえたと考えられるのである。

長田地区には、「番町」と呼ばれる江戸時代からの部落が存在しており、番町部落を中心としたスラム街が、明治期から戦後にかけて形成されていた。近代都市としての神戸の形成・発展の中で、全国から多くの人々が職を求めて神戸に流入するに伴い、市内各地にある「部落」（以下、「同和地区」とする）の人口も急増するとともに（番町地区に関しては表2参照）日本資本主義の初期の段階において、同和地区をはじめ都市下層社会に滞留した多くの人々が、資本の低い産業分野をささえる不熟練労働者として、低賃金・長時間労働などの過酷な労働を強いられたのである。

表2 番町地区の戸数・人口の推移(明治元年(1868)～昭和22年(1947)まで)

	戸数	人口		戸数	人口
明治元年 (1868)	85	388	大正元年 (1912)	855	4161
明治10年 (1877)	196	1004	大正7年 (1918)	1118	5568
明治20年 (1887)	454	2226	大正14年 (1925)	1540	6674
明治30年 (1897)	540	2401	昭和8年() (1933)	1057	5261
明治40年 (1907)	817	3509	昭和22年 (1947)	1870	7742

出所：『神戸市における同和行政の歩みと同和地区の実態の変化』杉之原寿一 兵庫人権問題研究所 2003 表中の数値は、1868～1918年は畑道雄「特殊部落に就きて - 神戸市長田村視察記 - 」(『日本社会学院年報』1921年刊)、1925年は神戸市社会課『神戸市内ノ細民ニ関スル調査 - 第二回環境ノ部 - 』(1926年刊)、1933年は神戸市社会課『要改善地区内生活状態と口戸調査』(1934年刊)、1947年は『神戸市統計書』による。()の1933年における数値の減少は、調査区域がやや狭くなったために生じたもの。

マッチ工業や、のちのゴム工業はその代表格であった。1887年（明治20年）前後から神戸でマッチ工業が急激な発展を遂げた際、長田の番町地区の周辺にも数多くのマッチ工場が設立されたが、それは、スラム街の安い土地と低廉な労働力を活用するためであったと考えられる（表3・4参照）。『神戸市史第3集・産業経済編』中の「ゴム工業」の節にも、以下のような記述が見られる。

「工場家屋、労働者を、そっくりマッチ工場の形態そのまま吸収したゴム工業は、やはり手労働が主だった。したがって、特別な熟練を必要としなかったため、不況の各地から失業労働者が流れ込んだ。大半が単純労働だから、賃金もきわめて安く、働き手一人では生活が苦しいため、いきおい下請家内工業、内職的家内工業がひろがった。工場周辺に、そうした低所得層のたまり場が生れ、ながい間、低賃金の基盤を支える存在となった」（神戸市 1967 P. 325 - 326）

表3 番町地区の職業構成(1912年)

	世帯主(%)	人口		
		男(%)	女(%)	総計(%)
靴製造	5(0.6)	7(0.6)	-(-)	7(0.3)
下駄直し職	152(17.6)	208(17.7)	-(-)	208(9.7)
藁職	5(0.6)	3(0.3)	468(48.8)	471(22.1)
植木職	35(4.1)	38(3.2)	-(-)	38(1.8)
燐寸職工	28(3.2)	31(2.6)	301(31.4)	332(15.5)
竹職	1(0.1)	2(0.2)	-(-)	2(0.1)
箒職	3(0.3)	3(0.3)	4(0.4)	7(0.3)
大工職	3(0.3)	4(0.3)	-(-)	4(0.2)
左官職	3(0.3)	3(0.3)	-(-)	3(0.1)
電車車掌	-(-)	2(0.2)	-(-)	2(0.1)
僧侶	2(0.2)	3(0.3)	-(-)	3(0.1)
市役所人夫	4(0.5)	4(0.3)	-(-)	4(0.2)
農業	71(8.2)	107(9.1)	-(-)	107(5.0)
仲仕	121(14.0)	136(11.6)	-(-)	136(6.4)
土方	40(4.6)	44(3.7)	-(-)	44(2.1)
日稼業	83(9.6)	88(7.5)	36(3.8)	124(5.8)
理髪業	8(0.9)	8(0.7)	1(0.1)	9(0.4)
按摩業	6(0.7)	6(0.5)	-(-)	6(0.3)
青物商	65(7.5)	71(6.0)	3(0.3)	74(3.5)
磨砂行商	-(-)	152(12.9)	-(-)	152(7.1)
牛肉商	5(0.6)	5(0.4)	5(0.5)	10(0.5)
質商	4(0.5)	2(0.2)	2(0.2)	4(0.2)
木賃宿	5(0.6)	4(0.3)	1(0.1)	5(0.2)
日用品商	54(6.3)	37(3.1)	58(6.0)	95(4.4)
その他	159(18.4)	208(17.7)	73(7.6)	281(13.2)
総数	862(100.0)	1176(100.0)	960(100.0)	2136(100.0)

出所：『神戸市における同和行政の歩みと同和地区の実態の変化』杉之原寿一 兵庫人権問題研究所 2
 003 表中の数値は、神戸市長田一部協議会「神戸市字番丁改善概況」(大正元年12月現在)による。

表4 番町地区における職業別就業者数

(1915年(大正4年)、1918年(大正7年))

	1915年	1918年		1915年	1918年
燐寸職工	379(23.9)	375(20.4)	屑物商		75(4.1)
農業	274(17.3)	266(14.5)	日用品商	73(4.6)	68(3.7)
藁業	246(15.5)	147(8.0)	磨砂商	43(2.7)	39(2.1)
皮革業	156(9.8)	216(11.8)	箒職	41(2.7)	39(2.1)
土方	106(6.7)	221(12.0)	日稼	38(2.4)	36(2.0)
馬力		146(7.9)	古物商	38(2.4)	
青物商	104(6.6)	107(5.8)			
仲仕	89(5.6)	106(5.6)	総数	1587(100.0)	1837(100.0)

出所：『神戸市における同和行政の歩みと同和地区の実態の変化』杉之原寿一 兵庫人権問題研究所 2003 表中の数値は、畑道雄「特殊部落に就きて - 神戸市長田村視察記 - 」(『日本社会学院年報』1921年刊)による。

下層社会における労働者の勤務事情

マッチやゴムのように、可燃物など危険な材料や臭いのある、また身体に悪影響を及ぼす材料を用いた工業に携わるのは、やはり下層社会に生きる人々が中心であった。

マッチ工業が衰退すると、番町地区におけるマッチ労働者もゴム労働者へと転換したのが、表5からうかがえる。表3・4では登場しなかった「ゴム職工」という職業が統計上に出現するのである。特に、女性のマッチ職工が多いことがわかる。『兵庫ゴム工業史』の中にも、「宿命的ともいうべき長時間労働、低賃金の事実は、マッチ工業史の中にも顕著に織り込まれている。マッチ女工の哀史は、古い神戸の産業を知る人の心に強い印象を持って刻み込まれている。しかし、当時の人々は、これを“救貧事業”と呼んで少しも怪しまなかったといわれる」(兵庫県ゴム工業協同組合・兵庫ゴム工業会 1978 p.95)という記述がある。ゴム工業もまた、分業や長時間労働というマッチ工業のやり方を踏襲した。規模の小さい各工場、金型・薬品・レザー・糊引き・運送といった分業を請負い、地域に職業集団を形成したのである。この零細企業による分業体制や内職といった労働スタイルは、現在の長田ケミカルシューズ工業においても残っている。

表5 番町地区における生産・技能工の職業別就業者数（1925年）

職種	総数(%)	職種	総数(%)	職種	総数(%)	職種	総数(%)
建築職人	13(0.6)	鋳掛屋	14(0.7)	鍛冶・鉄工	31(1.5)	屠夫	-(-)
竹細工	-(-)	畳職	-(-)	自転車職	2(0.1)		
靴・皮革	65(3.1)	洋服仕立職	-(-)	ゴム職工	49(2.3)		
下駄・靴直	96(4.5)	その他職人	-(-)	マッチ職工	477(22.6)	小計	761(36.0)
履物職	-(-)	土木請負	14(0.7)	活版工	-(-)	就業者総数	2113(100.0)

改訂：『神戸市における同和行政の歩みと同和地区の実態の変化』杉之原寿一 兵庫人権問題研究所 2003 表中の数値は、神戸市社会課『神戸市内要改善地帯之考察』（1925年刊）による。

また、同書はゴム工業の現実についても以下のように述べている。

「当時のゴム工場の労働条件はキビシイものであって、拘束12時間・実働11時間が一般的であったといわれている。（中略）雇用事情も不安定で、とくにゴム靴工場では、製品の需要が寒い時期に集中し、毎年12月から翌年3月までは仕事がなくて繁閑がはっきりしていたため、3月になるとどの工場でも張り紙をして職工を募集し、11月になるとクビを切るということを繰り返していたといわれている。もっとも雇用形態のキチンとしていたダンロップ護謨でさえ、“CC”と称する相似雑用の溜まり場を作っていて、毎日余剰の職工をそこへ送り込み、仕事の閑散期にはさらにそこから20～30人とクビを切るというやり方で、1000人近い従業員のうち約400人がこういう流動層になっていたと伝えられている」（兵庫県ゴム工業協同組合・兵庫ゴム工業会 1978 p.63）

こうした工業を支えたのが、長田に集まった貧しい人々であった。1910年（明治43年）年の韓国併合以来、故郷での生活難を理由に相次いで海を渡って働きにやってきた朝鮮人たちも、貧しさゆえに長田のスラム街に集まり、そして町の産業を支える、雇い主側からすれば格好の「低廉な労働力」たちとなっていたのである。

第3節 長田における朝鮮人集住の歴史

長田における朝鮮人の移住史

朝鮮人労働者の本格的な渡日が始まったのは、1917年（大正6年）以降であるといわれる。1910年（明治43年）の「韓国併合」以後、それまでの増加人口は年間で多くても1000人ほどであったが、1917年（大正6年）以降には9000人近くの増加になり、在日朝鮮人の総数は14500人あまりに達した（内務省警保局による）。増加の大きな原因は、日本国内の第一次世界大戦の好景気による労働者不足であった。当時の新聞には「空前の大戦景気で労働者の争奪戦」といった見出しが躍り、各工場間の労働者引き抜き合戦が盛んに報道された。朝鮮人が日本への出稼ぎを志した背景には、植民地支配の開始以降、急激な生活水準の悪化に見舞われたことがあるとされる。日本政府は「土地調査事業」の名目のもとに農民から次々と土地を収奪し、東洋拓殖株式会社など半官半民の植民地会社にそれらの土地を管理させた。その結果、「全人口の八割を占める朝鮮人農民の、八十五パーセント以上は土地を持たぬか、半小作農民に転落し」（郭早苗 1986 p. 40）たため、生活苦に追い込まれた朝鮮人農民たちは、職を求めて次々と日本に渡ったといわれている（*1）。

神戸には、「韓国併合」以前から朝鮮飴売りとして朝鮮人が居住していた。併合後も飴売りは朝鮮人の職業として引き継がれ、湊川遊園（兵庫区）界隈の朝鮮飴売りの群は「神戸の奇観」といわれるようになった。しかし、好景気による労働者不足で飴売りから労働人夫に転身する者が続出し、飴売りはすっかり影を失った（*2）。

第一次世界大戦が終わると、日本経済は一転して不況に陥った。神戸の朝鮮人労働者も職を失い、他地方に職を求めて移動する例も見られた。しかし、不況にもかかわらず長田のゴム工業地帯は活況を呈した。とくにゴム靴工業は地方の需要が旺盛で、工場新設の出願者が続出したという。さらに1923年（大正12年）の関東大震災時には、東京、横浜方面のゴム工場焼失により、全国の注文が神戸に殺到、工場間で熟練ゴム工を奪い合いするまでになった。長田への朝鮮人の集住は、このころに始まったのではないかと推測される。しかし、当時の工場は現在のように整備された工場ではなく、鍛冶屋のあとや民家の納屋、物置小屋といったものをにわかにならして工場に当てたもので、家庭的手工業の域を出ていないものであった。こうしたゴム工業の零細性が、朝鮮人職工の流入に拍車をかけたと考えられる。

長田地区の朝鮮人は、1920年代後半から30年代初めにかけては、神戸市の朝鮮人人口のほぼ半分を占めていた。具体的な数字を挙げれば、1926年（昭和元年）末の長田（長田）区の朝鮮人は1411人で神戸市の50.5%を占め、1930年（昭和5年）のそれは5035人で同42.3%を占めた。その後、神戸市全体の朝鮮人の増加により長田区の占める比率は小さくなるが、長田区の人口自体は1935年（昭和10年）7439人、1936年（昭和11年）は8535人、1939年（昭和14年）には146

92人と増えつづけた(外国人地震情報センター 1996 p.33)。但し、朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成』第2・3巻の中では、1929年(昭和4年)末の林田区の朝鮮人は2796人、1935年(昭和10年)が7719人とある(表6参照)が、両方載せておく。

表6 神戸市内における朝鮮人人口(1929年・1935年)

地区名		1929年	1935年	地区名		1929年	1935年
六甲区 1	人口	196	1422人	湊西区 2	人口	222	307
	%	3.24			%	3.67	1.87
西郷区 1	人口	37	8.66%	湊区 2	人口	31	314
	%	0.61			%	0.51	1.91
西灘区 1	人口	285	26.25	林田区	人口	2796	7719
	%	4.71			%	46.21	46.99
葺合区	人口	1722	4311	須磨区	人口	512	1840
	%	28.46	26.25		%	8.46	11.20
神戸区	人口	138	230				
	%	2.28	1.40				
湊東区	人口	112	282	計	人口	6051	16425
	%	1.85	1.72		%	100	100

出所：朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成』第2巻 1975 p.1051・第3巻 1976 p.1092

1 1935年時点で灘区として合併。 2 1935年時点で兵庫区と湊区に再編成。

長田地区、とりわけスラム街として市内外の貧しい労働者たちを集めていた番町地区における朝鮮人の流入について、詳しい記述をしている文献は多く見当たらなかったが、表7の数値に当時のその様子がうかがえる。やはり、安い住居と働き口を求めて多くの朝鮮人が下層社会に集まっていたことが推測される。

同和地区と朝鮮人部落 - 巨大な「スラム」の形成

長田における「同和地区」とは、番町地区に限られていたが、朝鮮人の集住は番町地区に限られてはいなかった。彼らは、番町地区から南に延びる「新湊川」の流域にも集住していた。新湊川は、旧・湊川の水害防止のために改修工事によってつくられた新たな人工河川で、1901年(明治34年)に完成した。しかし、完成後もたびたび水害を引き起こし、そのたびに改修工事で多くの人夫が動員された。韓国併合後、日本にやってきた朝鮮人たちも例外ではなかった。工事に携わった朝鮮人労働者とその家族を中心に、新湊川流域への集住が進んだのではないかとされている。その中でも最大の集住地域は、「大橋の朝鮮人部落」と呼ばれていた。戦後、北朝鮮への帰国事業が全国的にさかんになった1

960年（昭和35年）前後まで、この一帯は朝鮮人住民の暮らすバラック地帯であった（*3）。この番町地区と新湊川流域を核として、長田の町には巨大なスラムが形成されていったのである。（別図3「番町地区と新湊川流域の位置関係」参照）

表7 番町地区における人口転入状況（1952年）

	自町村から	自郡内他町村から	自県内他町村から	他府県から	朝鮮から	実数計	%
非同和地区	419人	296人	389人	492人	-	1596人	19
同和地区	-	1624人	1945人	1212人	-	4779人	58
朝鮮	-	-	-	-	1828人	1828人	22
実数計	419人	1938人	2334人	1704人	1828人	8233人	100
%	5	24	28	21	22		100

出所：『第4巻 大都市部落の実証研究』杉之原寿一 兵庫部落問題研究所 1985 p.32

朝鮮人の戦前の労働・生活事情

番町地区における労働者の動向や職業は先述の表3～5中からうかがえるが、当時の朝鮮人の労働事情もこれとよく似た様相を呈している。神戸市社会課が1929年（昭和4年）に実施した調査によると（「神戸市在住朝鮮人の現状」1930年発行 朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成』第2巻 1975 p.1055～1057に所収）、当時の朝鮮人の職業について、日雇い等の土工が半数を占め、次いで多いのが職工であると記されている。その職工の内訳は「護謨会社通勤者最も多し 護謨職工242、川崎造船所職工95、鉄工場86…」とある（表8参照）。

表8 神戸市内における朝鮮人労働者の内訳（1929年）

職業		総数	%
日雇労働者		1614	57
工業労働者	ゴム職工	242	29
	製油工	22	
	製鉄工	86	
	川崎製鉄工	95	
	印刷工	15	
	ガス工	4	
	硝子工	6	
	各種見習工	14	
	雑工	328	
商業		180	6
戸内使用人		169	6
雑業		29	1

出所：朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成』第2巻 1975 p.1056~57

やはりこの当時から、ゴム工業に従事する朝鮮人は多かったことが見受けられる。しかし、なぜゴム工業であったのだろうか。長田におけるかつての地場産業、マッチ工業は、「低賃金・危険・長時間」の労働を要する、スラム街の住民にとっての代表的な産業であった。のちにマッチ工業に代わって長田の地に興ったゴム工業も、そのような労働スタイルの系譜を継いでいた。と述べる資料が多い中、1927年（昭和2年）に神戸市役所社会課より発行された『在神半島民族の現状』には、以下のような表が掲載されている。（表9参照）

表9 神戸の主な工場における日本人労働者と朝鮮人労働者の賃金比較（単位：円）

使用者	最高賃金（日給）		最低賃金（日給）		平均賃金（日給）	
	日本人	朝鮮人	日本人	朝鮮人	日本人	朝鮮人
神戸市電気局	3.15	1.91	1.30	1.70	2.34	1.81
神戸市土木課	1.34	1.34	-	-	1.34	1.34
川崎造船所	8.14	2.26	0.50	1.60	2.26	1.78
川崎造船所葺合分工場	8.69	2.93	0.93	1.84	4.81	2.39
三菱神戸造船所	3.46	1.96	1.15	1.30	2.08	1.53
三菱倉庫神戸支店	3.50	3.80	1.70	1.70	2.30	2.30
神戸製鋼所	11.02	3.66	0.75	1.37	3.18	2.29
大倉土木出張所	2.50	2.10	2.20	2.20	2.35	2.15
神戸鉄道局鷹取工場	3.33	2.05	0.96	1.54	2.11	1.89
井上豆粕製造所	2.30	1.85	1.55	1.55	1.75	1.72
ダンロップ護謨株式会社	5.00	4.00	2.00	2.15	2.70	2.75
坂元護謨工業所	2.50	2.50	1.60	1.40	1.95	1.95

出所：神戸市役所社会課『在神半島民族の現状』 1927 p.174-175

「ダンロップ護謨株式会社」は、当時、川崎造船所や神戸製鋼所と並ぶ、朝鮮人労働者の代表的な勤務先であった。外資系の大会社ということも関係していたと思われるが、同社の賃金は他社と比較しても高い。また、川崎造船所や神戸製鋼所の賃金も比較的高くなっている。朝鮮人労働者は、「ハイリスク・ハイリターン」の仕事、すなわち危険を伴うが、少しでも多くの賃金を得られる工場に職を求めていったのではないだろうか。言葉や習慣の壁から、朝鮮人労働者を雇い入れなかった会社も多くあったに違いない。しかし、危険を伴う労働は通常、人には好まれない。それゆえ、そうした性質の労働はやはり下層社会の人間にまわってくる役割であった。こうした社会的な背景が、ゴム工場に勤務する朝鮮人労働者の数を増やしていったのではないかと推測される。さらに、長田にはこうした大企業の下請け、あるいは個人経営による零細工場が林立していたため、そうした工場に勤める労働者の賃金は当然、低くなった。

また、日本に移住する朝鮮人の多くが、慶尚南道（朝鮮半島南部、現在の韓国・釜山市周辺）出身である。これは、慶尚南道が朝鮮半島で最も日本に近い地域であったことが大きな要因であった。彼らは、山口県の下関港を経て日本各地に移住した。当時の慶尚南道は農村地帯であり、移住者の多くもまた、元農民であった。特別な熟練技術を持っていなかったために、彼らが、簡単で単純な手作業が中心のゴム工業に集まった、という推測もできる。長田以外の朝鮮人集住地域として知られる大阪市生野区や東京都荒川区においても、戦後から高度経済成長期、ゴムを原料とした「ヘップサンダル」(いわゆる「つつかけ」)

産業が盛んであったが、これらの産業が在日コリアンたちとその子孫によって担われたことにも、戦前の長田と同様、彼らの多くがゴム職工として労働に従事していたことが起因している。

別の資料中では、長田の朝鮮人のゴム職工数について、1933年（昭和8年）に林田署が「管内の朝鮮人職工は、職工全体の3割を占める」と発表している。この数字は正確かどうかかわからないが、当時の警察は治安の観点から朝鮮人の動向に細かく目を配っていたことがわかる。とくに1930年（昭和5年）から1933年（昭和8年）にかけての不況の時期には、長田のゴム工場地帯で朝鮮人職工の労働争議が続発し、警察との緊張関係が続いたとある。

就労と並んで朝鮮人にとっての難題は住宅問題であった。神戸市社会課が1936年（昭和11年）に発表した調査書中に、以下のような記述がある。

「全世帯の9.72%が救護を受けている実情にあり、いかにも経済保護の必要が感ぜられるのである。次に住宅についてみる時、其の殆ど全部が借家にして持家が4.49%あるも之は却つて借家すら出来ざるが為自身小屋掛のバラツクを作りしものにして、鮮人家主は1.34%に過ぎず、而して其の家賃は大部分が20円以下にして10円以下が67.17%を占めており、其の実情は大抵一室乃至二室家屋にして一人当量数は1.28畳である。然も尚斯る家屋の借入すら困難なる世帯が28.74%を占め彼らは何れも間借をしているのであつて、其の貸主の93.25%までが鮮人であり茲に又貸しの雑居状態が見られるのである」(朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成』第3巻 1976 p.1120-1121)

当時の大部分の日本人家主が朝鮮人に部屋を貸そうとしなかったこと、そして部屋を借りるのにも困難なほど窮乏していた朝鮮人の暮らしぶりがうかがえる。同書にはまた、「斯く其の経済的逼迫と環境乃至は其の無教育に依る道徳的觀念の低級さ、更に異風俗異習慣は始めに述べし如く尚社会悪発生の巢窟の如く見られ、鮮人問題対策の急を痛感せしむるのである」(朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成』第3巻 1976 p.1121)との記述もみられる。

さらに、先述の『在神半島民族の現状』においては、執筆者の神戸市職員すら「理論を超越して只もう朝鮮人に家を貸すなの、一点張りに向ふ見ずに押して来るんだから、何とも全く手がつけられない」(神戸市役所社会課 1927 p.198)と嘆かせるほどの、日本人家主による朝鮮人の入居差別と、そのために生じている彼らの住宅事情の窮状が克明に記されている。

「鮮人は家をドダイ滅茶苦茶にして仕舞ふから - 劔呑でかされないんだと家主側は - 一斉

に守備を固める。家をどうしてもかして呉れないから - 仕方なしに狭い家に大勢で窮屈なのを我慢して居るんだ。汚くなる様にしむけながら、今更汚くするとは何といふ言い草だらうと - 鮮人側は顔を真赤にしていきりたつ... (中略) とにも角にも朝鮮人が現在狭い - 汚い、向ふ三軒両隣の南京虫を一手に引受けたかのやうなむさい所に、寝起きして居ることだけは誰が何と言つても事実である。(中略) 貧乏人程高率な家賃の負担を強要せられて居る傾向にあることは、既に万人承知の所 - 今どき十円の家賃で、一体どんな家が借りられるんだらうか」(神戸市役所社会課 1927 p.198 - 200 旧漢字は新漢字に改めて表記。)

朝鮮人が同じ地域に寄り集まって居住するようになるのは、もちろん、貧しい者同士がお互いに助け合って生活するほうが暮らしやすいということもあるが、差別のために日本人一般の住宅地に入り込むことがむずかしいことが大きく作用している。ゴム工場のような「悪臭」の中で一日中働いた労働者たち。さらに、朝鮮人たちはにんにくを好んで多く使用する食文化を持っていた。その「臭い」を、さらに彼らの貧しい生活を「不潔だ」として日本人家主たちが嫌っていたことも考えられる(*4)。したがって朝鮮人は、日本人にとって条件の悪い土地に集住する傾向になり、それが、番町地区のようなスラム街とよばれた地域や、新湊川のような河川の流域への、朝鮮人の集住を促していたと考えられる。

韓国併合によって地元経済が窮乏し、よりよい生活を求めて日本に渡ってきたものの、日本にはさらに厳しい生活が待っていた。住むところ、働くところ共に条件が悪く、さらに地元の日本人や行政から敵視され続けた朝鮮人移民たち。しかし、一雇われ人として過酷な労働に耐えた彼らが、第二次世界大戦終了後、ケミカルシューズ産業に「経営者」として携わることで長田の経済の牽引役として、さらに長田のまちづくりの担い手として活躍するようになる。戦後の彼らの活動については、ケミカルシューズ工業の発展過程と現状の説明と共に、次章で詳しく述べてゆきたい。

(*1) このほか、日本企業によるいわゆる「人買い」や、強制連行等、朝鮮人が自らの意思によらず恣意的に日本に連れて行かれたとされる史実が、研究によって見つかっている。しかし正確な数値については諸説存在するため、本論文における詳しい記述は割愛させて頂きたい。

(*2) 参考文献：外国人地震情報センター『阪神大震災と外国人』明石書店 1996 p.33 - 34。湊川公園周辺の飴売りの姿は、終戦直後まで見られたという。

(*3) 参考文献：下中邦彦『日本残酷物語 現代篇1』1960 平凡社 p.164 - 165

(*4) 参考文献：野村進『コリアン世界の旅』講談社 1996 p.286 - 287

第2章 地域産業を支える在日コリアンたち

第1節 ケミカルシューズ産業の歴史に見るコリアンの社会進出

三宮闇市とゴム靴

長田区の地域経済を戦前から支えてきたゴム靴産業。戦後の物資難のさなか、ゴム靴は、闇市の人気商品として売れ続けた。

現在、JR 三ノ宮駅～元町駅～神戸駅と3駅間にわたって続くガード下に、「高架下商店街」と呼ばれる商店街が存在する。終戦直後、三ノ宮駅周辺には大規模な闇市が形成された。この商店街は、その「三宮闇市」から派生してできた商店街であるといわれている。現在でもここには布問屋や飲み屋、衣料品店や雑貨店等、数多くの店が軒を連ね、老若男女問わず多くの客を集めているが、ひときわ目立つのが、三ノ宮駅から元町駅にかけて続くガード下エリアの、靴屋の多さである。大阪が「食い倒れの町」というキャッチフレーズで親しまれているのに対し、神戸は「履き倒れの町」と呼ばれているほど、靴屋が多いことで知られているが、この靴屋の並びは、戦後の闇市の系譜を継ぐものである。野坂昭如氏の代表作のひとつである小説、『火垂るの墓』の中に、以下のような一節がある。

「まず焼けた砂糖水にとかしてドラム罐に入れ、コップ一杯五十銭にはじまった三宮ガード下の闇市、たちまち蒸し芋芋の粉団子握り飯大福焼飯ぜんざい饅頭うどん天どんライスカレーから、ケーキ米麦砂糖てんぷら牛肉ミルク罐詰魚焼酎ウスキー梨夏みかん、ゴム長自転車チューブマッチ煙草地下足袋おしめカバー軍隊毛布軍靴軍服半長靴、今朝女房につめさせた麦シャリアルマイトの弁当箱ごとさし出して…」(野坂昭如 1972)

ゴム長靴や地下足袋は終戦直後の生活必需品であり、闇市で飛ぶように売れた製品であった。こうした需要に支えられ、戦後の長田におけるゴム工業も著しく発展し、生産量はうなぎのぼりになった。その当時のゴム工業の隆盛ぶりについて、『日本ゴム工業史第2巻』の中では、次のような記述がなされている。

「戦後におけるゴム工場の企業数、工場数の増加ならびに生産設備の増大は、驚くべきものがあつた…年次的に、とくに伸びの目立っているのは昭和22年(1947年)であるが、これは、その年に生ゴム輸入が再開されたことと、闇市場の動きがとくに活発だったことなどによるものであろう。地域別にみると、企業の増加率が全国平均を超えているのは、兵庫県・東海地方・九州地方・大阪府・北海道であり、工場の増加率が平均を超えているのは、兵庫県・九州地方・大阪府であるが、そのいずれをとっても兵庫県が最高である。これは、同地域に、終戦時には存在しなかつた在日朝鮮人企業が多数設立されたという特殊事情によるところが大きい」(*1)

この時期から、在日コリアンたちの、「経営者」としてのゴム工業進出が始まったのである。戦前、日本人経営のゴム工場で過酷な労働と薄給に耐えていた彼らは、「下積み」によって熟練させてきた技術を生かし、続々と工場を興し始めた。

職工から工場経営者へ

池尾勝巳『ゴム工業の発展』には、「終戦後発展した新規企業のひとつの特徴としては、第三人 朝鮮人経営によるゴム工場が現れ、しかも短期間のうちに急速にその数を増したことである。ことに大阪および神戸付近においては、その工場数70を超え、関東においてもその数24を数え、全国では103工場に達しており、日本ゴム工業界にひとつの異観をあたえつつある」(* 2)との記述がある。(表1参照)

表1 昭和23年(1948)現在の地区別朝鮮人()経営ゴム工場数

	企業数	工場数
北海道		
東北		
関東	24	24
東海		
大阪	18	20
兵庫	53	58
岡山		
広島	1	1
九州		
計	96	103

出所：池尾勝巳『ゴム工業の発展』

原文中は「第三人」との表記になっているが、修正した。

『神戸市史第三集・産業経済編』においては、朝鮮人経営によるゴム工場が勃興した理由のひとつを、「外国人として法的な制限の少なかった朝鮮人」は、闇市や朝鮮半島からのルートを通じて、当時、物資統制によって入手しにくかった「ヤミゴム・再生ゴムをたくみに入手し」ていたためではないかと推測している。また、『在日朝鮮人企業活動形成史』（呉圭祥著、雄山閣 1992）によると、在日コリアンの同胞団体によって「生ゴム3トンを手配したり学校の建築資材としての木材2万石など」、各種原料が確保されたことが記されている。戦時中の物資統制を、外国人としてうまくいくぐったことで、彼らは生活する道を切り開くことができたのであろう。

また、先の『神戸市史第三集・産業経済編』には、「戦前・戦中を通じて下働きの労働者として差別にあえいできた朝鮮人経営者の進出は、業界に精神的な粘りを吹き込んだ。一

部では（朝鮮人ゴム工場群が）値くずし、乱売競争の震源地という批判が起った時期もあったが、その多くは中傷やデマであった。一部悪質な業者が、偏見に乗じて中傷し、デマを流したケースもあった」とも記されている（『神戸市史第三集・産業経済編』 神戸市 1967 p. 346 - 347）。にもかかわらず、彼らは地道にゴム業界へ進出しつづけ、1947年（昭和22年）には、同胞業者のみで兵庫県朝鮮人ゴム工業協同組合を組織するまでに至った。この間の朝鮮人経営者によるゴム工場の増加は、表2を参照されたい。

表2

終戦時から昭和24年（1949年）までの兵庫県における経営者別工場数の推移

	昭和20年(終戦時)		昭和21年(1946)		昭和22年(1947)	
	企業数	工場数	企業数	工場数	企業数	工場数
日本人経営のもの	34	38	(不明)	(不明)	63	69
朝鮮人経営のもの	0	0	(不明)	(不明)	49	52
合計	34	38	79	83	112	112
全国計	273	310	381	493	539	641
	昭和23年(1948)		昭和24年(1949)		/	
	企業数	工場数	企業数	工場数		
日本人経営のもの	85	96	106	116		
朝鮮人経営のもの	60	66	70	76		
合計	145	162	176	192		
全国計	673	784	788	890		

(注) 昭和20年(1945年)以外は年末時点での統計

出所：兵庫ゴム工業共同組合資料

現存する、在日コリアンのゴム工場経営者の団体である「神戸ゴム工業協同組合」が発行した『神戸ゴム工業協同組合史』(1987年刊)には、「ゴム工業は労働集約的な産業である。他にも中小企業の製造業には、そうしたものが多いのが特徴である。かつてその初期において、衰退するマッチ工業の従業員を吸収したゴム工業は、低廉な労働力を必要とした。海を渡って日本に働き場所を求めた同胞が蔑視と迫害の中で、有利な職場を得ることは先づ不可能であった。彼らにとってゴム工場は、環境は悪く、しかも低賃金ではあったが数少ない残された職場の一つであったといえよう。戦前、戦中、ゴム工場の下積みとして働いてきた同胞は多い。そうしたことが、戦後同胞によるゴム及びその関連業界での活動が大きく評価され、神戸のゴム工業界に隠然たる勢力を持つにいたる原因であろう。戦後の混乱の中で、いち早く復興したのがゴム工業であったが、それに貢献した功の半ばは、わが同胞に与えられるべきものだった」(神戸ゴム工業協同組合 1987 p. 11)と記され、当時の在日コリアン1世たちの苦勞を偲んでいる。

「ケミカルシューズ」は在日コリアンの発明品

戦後は統制によって原料のゴムが手に入りにくかったことから、長田のゴム業者は、1946～48年（昭和21～23年）にかけて、布や人工ゴムを駆使した新しい靴を発明するようになっていた。そのアイデアが、ケミカルシューズ発祥の素地になっていったとも考えられる。

国内でのゴム靴の需要に加え、1950年（昭和25年）に勃発した朝鮮戦争が海外向けの需要をも促進し、いわゆる「軍事特需」が発生した。

しかし、1951年（昭和26年）に生ゴムの統制が解除されると、ゴムの価格が一挙に暴落し、戦後から急激にその数を増やしていた全国各地のゴム工場は、次々に倒産に見舞われた。神戸市内においても、倒産に追い込まれたゴム会社の数は50社以上にのぼった。そのため、地場産業である靴工業の生き残りをかけて、長田の町は、ゴム靴の生産地から、新たな原材料による「第2の靴」の生産地へと転換を余儀なくされた。

現在の「ケミカルシューズ」の前身となる塩化ビニール製の靴が長田区で産声を上げたのは、1951～1952年（昭和26～27年）にかけてのことであった。発明者が誰であるかは、はっきりしていないが（*3）、長田区内のあるゴム職工が、塩化ビニールを材料に用いた靴を偶然発明したのが、ケミカルシューズの元祖であるといわれている。このことをきっかけに、長田のゴム職工はこぞって新素材の開発に取り組み、合成皮革・合成ゴム・ビニールなど、それまでの天然ゴムに代わる人工素材を用いた靴を発売した。

懸命な企業努力の結果、長田のビニール靴は全国で飛ぶように売れていった。このため、長田のゴム工場の経営者たちや、全国の靴問屋たちは、「神戸産のビニール靴」のイメージアップをはかり、キャンペーンを試みた。その話し合いの場で生まれたのが、「ビニール靴」に代わる新たな名称、「ケミカルシューズ」であった。化学的な材料からできる靴＝「ケミカル」シューズ。この名称が広まったのを機に、長田のゴム職工たちがこぞって「発明者は私だ」「命名者は私だ」と言ったといわれるが、ケミカルシューズ産業に古くから携わる人々の間では、ケミカルシューズの発明・命名者は『ソニーシューズ（後のグリーンシューズ：現在は廃業）の西原さん』こと韓哲曦（ハン ソッキ）氏であると語り継がれている。長田の基幹産業となる「ケミカルシューズ」の名称の生みの親が、在日1世のコリアンだったのである。

韓氏は、大阪でのゴム工場経営を経て、戦後は東京・浅草で靴問屋を営んでいた。神戸産のビニール靴の新たな名称をめぐり、同業者で話し合いをしていた際、韓氏が「ケミカルシューズ」という名称を提案したという。その時のエピソードが、彼の自伝である『人生は七転八起 - 私の在日70年』（韓哲曦 岩波書店 1997）の中に記されている。

「さまざまな案が取り上げられたが、なかなか適当な名称がない。そのなかでは清水（東京ゴム履物卸商業協同組合）副理事長が提案した『化学靴』が、一番まじだったが、いか

にも古びた感じで今風ではない。なにかカタカナ書きの、もう少ししゃれた名がないものか。

そこで、化学靴を英語にして、ケミカルシューズではどうですか、というと、少し下を噛みそうだが、まあいいか、ということになった。

『ケミカルシューズ』に決定だ。

さっそく東京ではケミカルシューズの一大キャンペーンが展開され、大成功をおさめた。

ケミカルシューズは、その後もつぎつぎと新素材による製品によって、革靴のシェアを大きく侵食して、最盛期を迎えた。そして五五年（1955年）からは、通産省が、ケミカルシューズを正式名称として使用した」（韓哲曦 1997 p. 148 - 149）

韓氏は、神戸市立中央図書館内にある韓国・朝鮮関連の書籍を集めた「青丘文庫」への蔵書寄贈者として知られている。靴工場を経営しながらこつこつと集めた朝鮮関連の書籍は、約3万点にもものぼる。

「青丘文庫は、最初、国鉄（現 JR）の鷹取駅から歩いて5分くらいのところにあるビルにありました。韓さんが所有するビルの5階に文庫が設けられていたのですが、ケミカルシューズの工場がいくつも入居しているビルの廊下や階段を歩くと接着剤の臭いが鼻を刺激します。息を切らせて5階まで階段を歩いて上がると、そこはまったく別の世界であるかのように、朝鮮語の本が並び、少しかび臭さもたよう青丘文庫になっていました。このビルは、阪神大震災で延焼して今はありません。1986年に韓さんが須磨区の自宅を建て替えられ、メゾンド青丘と名づけられたビルの1フロアに青丘文庫を移転されていたため、震災の被害に遭わなくてすみましたが、もし鷹取のビルにそのまま置かれていたら、貴重な文献が焼失していたかもしれません」（神戸市立図書館報『書燈』No. 261（1997年11月）「青丘文庫の紹介」水野直樹）

現在、長田でこのケミカルシューズ製造業に携わる会社の経営者の約6割が、在日韓国・朝鮮人であるといわれる（日本ケミカルシューズ工業組合による）。戦後の混乱期を乗り切るために、彼らはゴム靴工場の経営に目をつけた。それは当時の彼らにとって、生活の糧を得る、そして日本社会を生き抜くために、最も成功が見込めそうな手段のひとつであったに違いない。そうしたケミカルシューズ製造業への進出は、長田の在日コリアンたちにとって、地域社会における進出をも促す好機となったともいえるだろう。海を渡り、貧しい下働きに耐え続けた彼らが、戦後、長田の町の経済を一手に担う存在にまで成長したのである。

民族主義か、「日本社会にならえ」か

長田の在日コリアンの工場経営者たちは、「神戸ゴム工業協同組合」の一員として、同胞とともに業界を支えてゆこうと体制を整える者もあれば、日本人経営者を中心とする工業

組合に所属する者、また、個別に親睦会を結成して活動する者など、様々な立場の者がいた。在日コリアンの経営者たちから成る「神戸ゴム工業協同組合」においては、民族主義を守って日本人団体とは一線を画した活動をしてゆくか、或いは日本人団体と協力して活動を進めてゆくかを巡り、意見が分かれ、「灰皿が飛び拳固がうなる」(『神戸ゴム工業協同組合史』)ほどの論争にまで発展したこともあったという。しかし当時は、戦時中の統治から朝鮮半島が解放されて間もない時期にあり、どの在日コリアンたちも、今まで抑圧されてきた「朝鮮人」としてのアイデンティティを、強く訴えてゆきたいと望む、高揚した民族主義ムードが同胞間に流れていた。

その一方で、「日本社会に溶け込む努力なくしてはコリアンの発展はありえない」と訴えた経営者たちもいた。平和ゴム工業(現・株式会社平和)会長で在日コリアン1世の姜賛順(日本名・水山喜夫)氏は、『神戸ゴム工業協同組合史』の中で、以下のように自身の理念や日本社会における姿勢を語っている。

「私が思いますに、戦前日本にきた人たちは労働するのが目的であり、特にゴム産業に関与する業者は殆どそうであったということです。(現在経営者としてケミカルシューズ産業に関わる朝鮮人の)おおかたの方が日本で生まれた二世の方々に日本の教育を受け、日本の社会に交わり、日本人同様の生活、社会活動をなさっていると考えますし、仕事も場合によっては制限される職場がありましようが、ゴム産業、ケミカルシューズ産業ではなんら支障はないだろうと思います。(中略) 自分の仕事に専念して社会に恥じないようにする。即ち日本人から見て、日本政府から見て好かれる外国人になること。日本人が実働10時間ならば、われわれは2割多い12時間働かなければ日本人と同等についてはゆけない。我々民族は個々では優秀な才能をもっており日本人には負けない。しかし10人、20人集団で仕事をする時には日本人に劣るので、これの是正に取り組む必要がある。の3点が我々に課せられた使命であると思います」(神戸ゴム工業協同組合 1987 p. 107)

姜氏のこの言葉は、日本人の社会の中にできるだけ適応し、民族的なハンディキャップを自認した上で、日本人以上の努力を重ねることで立身出世してゆかなければならないという彼の強い意思を端的に表したものであるといえる。

業界内でのコリアンに対する差別

こうした業界内でのスタンスの違いこそあれ、敗戦後の混乱期を乗り越え、長田におけるケミカルシューズの生産足数は飛躍的に伸びていった。(表4参照)特に、1955年(昭和30年)から1960年(昭和35年)にかけての、いわゆる高度経済成長期には、ケミカルシューズの生産足数は毎年、倍増していた。

表4 ケミカルシューズ・ゴム履物の生産の推移(1951年 - 1966年)

単位:千足

	ケミカルシューズ		ゴム底布靴		総ゴム靴		地下足袋	
	全国	兵庫	全国	兵庫	全国	兵庫	全国	兵庫
昭和26年(1951)			43439	12184	28071	8485	21754	1608
昭和27年(1952)			37746	11726	28599	9591	20943	1163
昭和28年(1953)			44588	13793	34318	9266	25940	1527
*昭和29年(1954)	2190	1475	46940	15191	33267	10071	18455	1714
昭和30年(1955)	2828	2278	57165	15853	30738	8570	19821	2389
昭和31年(1956)	6227	4965	61504	16022	37002	11051	19404	2156
昭和32年(1957)	13730	11286	68394	14601	42558	12086	20603	2434
昭和33年(1958)	28646	26498	71871	14302	36784	8129	17558	2126
昭和34年(1959)	45947	43649	77833	10444	45358	5948	17291	2954
昭和35年(1960)	72420	69520	92086	11987	46923	4209	20588	3439
昭和36年(1961)	80590	77360	87578	9875	46610	5416	19814	3571
昭和37年(1962)	85200	81190	92013	7524	51823	3368	18814	3292
昭和38年(1963)	77530	75980	85364	5197	56412	4485	17739	3169
昭和39年(1964)	81810	78290	86480	6040	51629	3043	16610	2892
昭和40年(1965)	78380	76130	83146	8169	38391	3061	16723	3014
昭和41年(1966)	89330	85930	85638	8485	39300	3808	14949	2383

出所:兵庫ゴム工業共同組合資料

*昭和29年(1954)のケミカルシューズ生産足数は、7月から12月までの統計。

この間、1957年(昭和32年)には、在日コリアンの工場経営者と日本人の工業経営者が共同で、「東なく、西なし、民族の如何をとわず、業種一本の工業会」(香山永秀『かっぱ談義 けみかる年代記』私家本、1964)をスローガンとした「ケミカルシューズ工業会」(のちの日本ケミカルシューズ工業組合)を設立するまでに至り、ケミカルシューズ業界における在日コリアンの地位は日本人に並ぶものとなった。

いきおい長田の地場産業の牽引役となったコリアンたちであったが、必ずしも地元や業界の中で、手放しで受け入れられていたとは限らないようだ。

先述の『かっぱ談義 けみかる年代記』(1964年発行、私家本)は、ケミカルシューズ産業に携わる人々の間で、当時の業界の人間によって書かれたケミカルシューズの歴史を語る貴重な資料として大切に扱われている本である。著者である香山永秀(本名・李永秀)氏は、ケミカルシューズ工場を経営する在日コリアン1世であり、軽妙な文体で神戸ケミカルシューズ産業の歴史を綴っているが、その文中に、「余談ですが」と一言断って、

同業の日本人による差別的な発言をやんわりと批判する一節がある。ケミカルシューズ工業会を官庁や大手靴メーカーの重役たちが訪れた時、客の一人が「ぼつんと興ざめ顔で『C・S（ケミカルシューズ）業界は三国人経営者が多いのでまとまらない、ということ

「同席の大関ゴムの児玉さん（児玉幸雄氏）も私も所謂第三国人なのですが、それを御存じなくほんとうにきかされていたことを気にされて質問されたと思います。児玉さんも私もいやな思いをさせられましたが、『児玉も香山もT氏の酒の肴にされるその三国人で、神戸のC・S業界にはそのはじめからして三国人経営者の多いことも事実です。だから成程三国人云々といつて、“私こそは”といえはフィクションもあり、皆さんの注目をひきつけるにはもってこいの題目だと思ひますが、本日此の席上で皆さんもお解りのように、私達神戸のC・S業者は工業会創立の前から、根本的な考え方として業種一本の団体結成の理想のため、東なく西なし民族の如何を問わず、業界の安定を願い、協調を計つて誠心誠意協力しており、T氏のというような事実は絶対ありません』と...（中略）T氏は最近も神戸新聞紙上に『第三国人云々』で事実無根の談話を発表し、世の非難を受けており、性格の致す処、気の毒には思うのですが...」（香山永秀 p. 146 - 147）

露骨な差別発言に耐えかねて、書かずにはいられなかった香山氏の心情がよく表れている。在日コリアンが比較的多いケミカルシューズ業界でさえ、当時、このような差別が実際に存在していたことがわかる。当時の業界の実情を克明に記した貴重な文献である。

帰国運動と長田のコリアンたち

折しも、長田のケミカルシューズ産業が飛躍的な成長の真っ只中にあった1959年（昭和34年）は、在日コリアンたちの北朝鮮への「帰国運動」が全国的に展開され始めた年であった。

当時、1世の多くは既に日本で家庭を築き、2世に当たる彼らの子どもたちは、日本式の文化にも慣れ、日本語を不自由なく話す者がほとんどであった。終戦後、朝鮮半島が解放された時には、祖国が再び自由を手にしたことに、在日コリアンの同胞たちは皆歡喜の声をあげた。しかしそれから間もなくして、1948年（昭和23年）彼らの母国である朝鮮半島は韓国と北朝鮮、2つの国家に分断されてしまった。さらに1950年（昭和25年）には、東西冷戦を背景に、2国間で朝鮮戦争が勃発した。戦乱によって荒れた故郷の地には帰る場所もなく、また、その機会もうかがえずに、彼らの多くが戦後も日本で暮らし続けることを余儀なくされた。さらに、1952年（昭和27年）の対日講和条約発効により、彼らは戦前に強制的に与えられた日本国籍を、選択の権利も与えられず一方的に剥奪されることとなった。彼らは国籍条項によって、参政権も与えられず、年金等の保

障も一切受けられないなど、日本の社会福祉制度から除外されただけでなく、就職差別や入居差別など、あらゆる場面で「外国人」として日本のコミュニティから排除される立場に置かれていた（*4）。

在日コリアンたちにようやく権利が認められるようになったのは、日韓基本条約締結を受け、法的地位協定によって「協定永住権」を認められた韓国籍を持つ在日コリアンたちが、国民健康保険の適用を受けられるようになった1965年（昭和40年）以降であった。しかし、日韓基本条約の中で、日本は、大韓民国政府を朝鮮半島における唯一の合法政府として認めることが合意されており、北朝鮮に国籍を有す「朝鮮籍」の存在が法的には正式に認められなかったために、韓国籍を有さない在日コリアンたちは、同条約中で認められた社会保障を享受することができなかった。朝鮮籍の在日コリアンたちに「特別永住権」が認められ、彼らが韓国籍の在日コリアンたちと同様の社会保障を受けられるようになったのは、1982年（昭和57年）になってからのことであった（*5）。

彼らがそうした多大なハンディキャップを背負いながら、それでも日本社会でなんとか生きてゆく方法を模索していた彼らの、当時の精神的な不安は計り知れない程のものであったことだろう。

在日コリアンの多く暮らす長田の町で、地域経済の担い手として生きてゆく中でさえ、彼らは先述のような日本人同業者による差別や偏見を受けることがしばしばあった。ケミカルシューズ産業に従事していた彼らの場合、地域住民と協力して町の経済と発展に貢献していたことが、長田における地元日本人住民たちの「露骨な差別」を多少は抑制していたのではないかと推測されるし、次節でのヒアリング結果からも、そのような事実があったことが確かめられる。しかしながら、社会において「在日コリアン」の存在が受け入れられていなかった地域の場合、彼らの受ける差別や偏見は苛烈なものだったのではないだろうか。

帰国運動の盛り上がりは、そうした当時の社会的背景が、「差別と不当な扱いに苦しむ日本での生活から逃れて、祖国に帰りたい」というコリアンたちの思いが反映されたものであったと考えられる。朝鮮戦争からの復興が進む祖国への生活に憧れた者もいた（*6）。また、集落の一角の在日コリアンたちが一斉に帰国した集住地域もあった（*7）。

在日コリアンたちが多く暮らす長田の地においても、運動の盛り上がりは例外ではなく、やはり北朝鮮への帰国を希望する者が次々に現れた。長田区浜添通にある西神戸朝鮮初中級学校に子どもたちを通わせるコリアン1世の父兄たちを中心に、帰国運動が過熱した（*8）。また、近所に暮らしていたコリアンたちや親族が北朝鮮へと帰国していったケースもヒアリングから伺えた（*9）。しかし、戦後にゴム工場を興した在日コリアンたちは、ケミカルシューズ産業の隆盛期を迎えていた当時、様々な立場や心境にありながらも、そのほとんどが帰国の道を選ばず、日本で生きてゆく道を選んだという（*10）。

工場の経営が軌道に乗り、経済的にも、そして地域での社会的地位を手にしたという点でも、「これなら日本社会でもやっていける」という自信を、彼らは抱き始めていたのでは

ないだろうか。

次節では、戦後のケミカルシューズ産業創成期より長田で靴産業に関わってきた在日コリアン、また、「地元っ子」として町の発展と変化とを見つめてきた在日コリアンの人々へのヒアリング結果を中心に、「靴工場の町」としての戦後から現在までの長田のあゆみと、地域の問題、さらに、震災以降続く地域経済の低迷から、「地場産業の担い手」としてのアイデンティティの持続が危機に晒されている長田コリアンたちの苦悩と今後の展望を描いてゆきたい。今回の執筆にあたっては、現在の長田におけるケミカルシューズ産業の隆盛から景気後退、そして阪神大震災を機に一気に傾いた町の経済、現在の長田とそこに生きる在日コリアンたちの状況に関し、様々な立場のコリアンたちの体験談と意見を聞くことができた。教科書や文献にはなかなか現れない「地域コミュニティに対する、在日コリアンの生の声」を、できるだけそのままに、次節に反映させてゆきたい。

注：

(* 1 ・ 2) どちらも『兵庫ゴム工業史』兵庫県ゴム工業協同組合・兵庫ゴム工業会 1978 による。

(* 3) 香山永秀『けみかる年代記』によると、ビニールとゴム底の張り合わせが可能な接着剤が1952年(昭和27年)に市販されたことが、各工場でのビニール靴の製造を一挙に盛んにしたと述べられている。同書やヒアリング調査でも、当時「私が最初にビニール靴を発明した」と自称する工場主が至るところにいるため、どの説が本当かはわからないが、長田のゴム業者が生み出した靴であることには違いはない、とのことであった。

(* 4) 参考文献：仲原良二『在日韓国・朝鮮人の就職差別と国籍条項』1993 明石書店。

(* 5) 参考資料：「日韓・日朝関係の正常化」ホームページ

<http://opinion.nucba.ac.jp/~kamada/H15KAsia/Asia15-9.html>

(* 6) 「...千里馬(チョリンマ)の如く急速な発展をする祖国に対し、さまざまな差別の下でうめき苦しむ在日朝鮮人が、大きな希望を抱いて新天地への活動を夢見た...(中略)荒川のヘップ(サンダル)工場付近の朝鮮人集住地でも、帰国願望の火がついていて、熱気があふれていた。足立、三河島などの朝鮮人集住地区でもしかり」(韓哲曦 1997 p.164 - 165)

(* 7) については、(* 6) と関連した内容が、2002年9月14日実施のB氏へのヒアリングから伺えた。「東日暮里3丁目、いまの朝鮮学校(東京朝鮮第一初中級学校)のあたりに、昔は大きな朝鮮人部落があった。けど、帰国運動でたくさん人が帰って行って、随分人口が減ったね」

(* 8 ・ 10) 2003年11月22日 A氏へのヒアリングによる。

(* 9) 「うちの叔母さんも帰国したんです。神戸駅に、1番ホームってあるでしょう(臨時ホーム・平日の朝のラッシュ時と特急列車の停車にのみ使用)。あすこから、(北朝鮮行きの船が港から出る)新潟行きの電車が出て。うちの母親も、見送りに行ったって言うてました。ホームにはようけ(たくさん)見送りの人があって、熱気に包まれてたって話してましたわ」(2003年11月20日 C氏へのヒアリングによる)

第2節 地域産業の担い手として 長田コリアンたちの道程

「長田は『ゴム屋さん』、つまりケミカルシューズ産業で生きているような町であった。小零細工場や三、四階建ての貸工場などが表通りから裏通りまでびっしりつまっていた。どこを歩いても裁断機の音、ミシンの音、金型の落ちる音やふれ合う音がしないところはなかった。長屋の家の前、アパートやマンションの入口にも、五足、一〇足単位で紐でくくられた中底や脚皮が、どこかしことなく置かれていた。

『(中略)ここも朝鮮人ようけいるわ。あの人も、その人も同胞やろ』

『そら、日本では(大阪市生野区の)猪飼野の次に朝鮮人が一番ようけ住んどるとこやからな。朝鮮人社長の会社が多いとこいうたら、長田や』」

(韓哲曦 1997 p.177-178)

長田コリアンの見た「ケミカルシューズの町」の風景

在日コリアン2世のC氏は、JR新長田駅南側に位置する長田区腕塚町に生まれ育った。彼は、「長田は、町全体がひとつの大きな工場のようなもの。町のみんなが何らかの形でケミカル(シューズ産業)に関わってるんですよ」と話す。家族経営を中心とする零細工場が、下請けとしてメーカーを支えている。(別図4「ケミカルシューズ産業の内部構造」参照)また、家内工業(内職)が多いのも、長田ケミカルシューズ産業にみられる昔からの特徴のひとつである。

C氏は社会保険労務士の資格を取って独立し、家業を継がなかったが、実家は「ミシン場」(内職の縫製工場)を経営し、家族や親戚の皆が、長田のケミカルシューズ産業に、やはりメーカー下請けのミシン工や貼工として携わっていた。

「メーカーが倒れれば、町の経済もバタバタと倒れるんですよ」

高度経済成長期、長田のケミカルシューズ業界は好景気に沸いた。製品はどんどん海外へと輸出された。「その当時、僕らは、ケミカルシューズを家族が作る姿を見ることはあっても、できあがった製品そのものを見たことは一度もなかった。それは、長田のケミカルシューズが圧倒的に輸出もの中心だったから。僕らは、大丸(近所の百貨店)まで行かないと、できあがった靴が店頭に並んでいるのを見ることはなかった」(以上、*1)

ケミカルシューズ産業の発展は、地元商店街の発展をももたらした。その象徴が、お好み焼き屋である。長田には、現在でも非常に多くのお好み焼き屋が存在するが、これはケミカルシューズ産業と密接に関係しているという。お好み焼きは、ケミカルシューズ産業に関わる人々にとって、仕事の合間や終わりに気軽に食べられる「おやつ」だったと、C氏は話す。「今は主食みたいになってるけど、感覚としては大判焼きを食べに行ったりするような感じ」長田のお好み焼き屋は、また、いまや全国区でその名を知られるようになった「そばめし」の発祥地としても知られている。この「そばめし」の誕生にも、長田の工場町としての存在が大きく関わっている。お昼時になると、ケミカルの工員や“貼り子さん”(パートアルバイトでで靴底や外地を貼り付ける仕事をする人々)たちが、家から

弁当箱に入れて持ってきた冷ご飯を、近所のお好み焼き屋まで持って行って、鉄板で温めてもらっていたことが、現在の「そばめし」の原型となったといわれている。

「そばめしなんて、昔はメニューには入ってなかったよ」と、長田の人々は口々に言う。そもそもそばめしは、「『おばちゃん、（各自が持ってきた）これ（ご飯）でそばめし作ってや』と、注文して作ってもらうもの」だったのだという。

「忙しくて腹が減る、でも手っ取り早く炭水化物を摂りたい。そういう人らのためにそばめしはあったのかもしれない」と、かつて朝鮮学校で教師をしていたD氏は語った。

「朝高（神戸朝鮮高級学校・神戸市西部の垂水区に位置する）の側にもお好み焼き屋さんがあって、生徒らとよくそばめし食べましたよ。あいつらは育ち盛りで、早く、安く、できるだけ多く食べたいねん。それで、そば（焼きそば）とめしが一緒になったそばめしを頼む。やっぱりメニューにはなかったですわ。ケミカルの工場の人らがそばめしを食べたんも、同じような理由かもしれないなあ」

（以上、*2）

「人情」で支えあう業界

在日コリアン2世のE氏は、長田の町で婦人靴メーカーを営んでいる。高度経済成長期真っ只中、長田の町がケミカルシューズ産業によって沸き返る1959年（昭和34年）、現在の会社を興した。その当時のことを、金氏は以下のように振り返る。

「父親は神戸製鋼で働いていました。私が会社を興したのは24歳の時です。お金を工面したり、その時の苦勞は語り尽くせない程ありましたよ。会社を興すために資金が必要だった。当時、三宮駅の辺りには闇市があって、そこに（ゴムの）問屋さんがあったんです。今でもありますよ。日本人の方の問屋さんです。そこの問屋さんに、1年できっちり返済するから、何とかお金を貸してもらえんかと、必死で、頭を下げてお願いした。すると、その問屋さんは私の顔をじっと見ながら2、3時間うーんと考え込んで…。しばらくして、『よし、貸そう。若い君の熱意に心を打たれたよ。これで頑張ってくれ』と、10万円貸して下さった。感動しましたよ。そうして集めた資本金、20万円で、工場を始めました。一日3時間睡眠、働きに働いて、結局2年かかって借りたお金を返済しました。若い自分に希望を託してお金を貸して下さった、そして自分を信じてくれたその方への恩は、忘れられない。せやから自分も、これから会社を興そうと立ち上がる若い人には、できる限りの支援をしてきた。『貸したお金は出世払いや、うまく軌道に乗るまで、大変やけど頑張れ』と言って、見守ってきました。この業界（長田のケミカルシューズ業界）は、そういう人情の強さで成り立ってきたと思いますよ」

長田の地において、在日コリアンたちが積極的にケミカルシューズの工場経営に乗り出した背景には、集住地域ならではの「コリアンたちが産業をやりやすい」空気が起因していたと、E氏は話す。

「やっぱり、在日ということでハンデはありましたよ。それでも、まだ神戸やから（経営を）やりやすかった。昭和40年代に入ってからやね、朝鮮人の就職事情や社会保障制度が改善されてきたんは。それまでは、朝鮮人が日本の企業に就職することは難しかったし、お金やアパートを借りるのにも、朝鮮人やから、いう理由でしょっちゅう断られたりしてましたよ。それで、朝鮮人たちは自分で会社を興したりするしかなかった。私らのようにケミカルシューズの工場、製造業が中心やね。あとは、土木業の人も多いですよ」（*3）個人経営の小さな工場がお互いに寄り集まり、さらに、工場周辺の各家庭では、貼り子等の内職がさかに行われ、先述の高氏の言葉を借りれば、「町全体がひとつの大きな工場」であった長田。国籍の区別を問わず、住民が皆で力を合わせて地場産業を支えていた長田の町に、E氏の言葉通り「人情の強さ」が醸成されていったのは、ごく自然のことであったのだろう。

ケミカルシューズが地域商業に与えた影響

そんな、長田の町の最大の強みともいえる「下町人情」を語るのに、商店街の存在は欠かせない。長田には現在でも商店街が多く存在するが、ケミカルシューズ産業の最盛期は、商店街の最盛期でもあった。先述のお好み焼き屋のように、ケミカルシューズ産業に従事する工員たちが、飲食店や喫茶店を憩いの場として頻繁に利用していたためである。外国人地震情報センター『阪神大震災と外国人』の中には、阪神大震災以前、長田の玄関口であるJR新長田駅の前で喫茶店を営んでいた、在日コリアン1世のおばあさんの話が登場する。その一節を抜粋させていただきたい。

「以前は今よりも工員さんたちが多かったし、経営者は経営者で、小さい工場のいっぱいいっぱい作業スペースとしていたので、社内に商談の場所がなかった。だから経営者がお客さんと話すときは、近所の喫茶店に行って話しましょうか、ということになる。同時に喫茶店は近隣の情報交換のスペースとなって、そこへ行けば商売のヒントを集めることもできた。また、大きめの工場を持っている人ならば、自分は人を雇って工場をやり、余ったスペースを喫茶店に改装して娘さんがママさんになるというパターンもあった」（外国人地震情報センター 1996 p.80）

私がヒアリングで在日コリアンの方々の工場を訪ねさせて頂いた際も、近所の喫茶店からコーヒーを出前して頂くことがしばしばあり、工場と喫茶店とのつながりの深さを感じた。ケミカルシューズの繁栄は、地域の商業にも恩恵をもたらすものであった。

在日コリアン2世のF氏の家族も、ゴム工業に従事していた。「長田のケミカルシューズ産業が、神戸の経済全体をよくしとったんです。ケミカル（シューズ）が儲かると、神戸の町が儲かった。景気がいいと、ケミカルの工員が、パチンコ屋さんに行くでしょ。するとパチンコ屋が儲かる。ごはんを食べるにしても、お好み焼き屋とか、夜は焼肉屋に行

ったりする。すると商店街のお店が儲かる。社長さんらは、接待でスナックに行くでしょ。すると三宮の歓楽街が儲かる。こんな感じで、いろんなものが、ケミカルにつながった」

F氏の挙げた産業はまた、在日コリアンの人々も多く携わる産業であった。しかし、「よく、ケミカルは在日の産業や、言われるけど、あれは違いますよ。ケミカルの工場、行ってきたでしょ。あそこで働いとる人に、なに人ですか、って聞いてみた？ 朝鮮人と違うで。たいていは、日本人なんです。ケミカルの工場には長田の人間だけじゃなくて、明石から、主に西の人やな、加古川や姫路からも働きに来る人がようけおったんです。みんな日本人ですよ。大きな産業が向こうにはなかったから、みんな神戸の、長田まで出てきて、ケミカルの工場で働いとった。（ケミカルシューズ産業が）在日の産業やと思われとるんは、（メーカーの）下請け会社の経営者に在日が多かったからやな。震災前、ケミカル業界で働いとった人は4、5万人おたって言われようけど、その中で在日の人口は5、6000人くらいやな。ベトナムの人も含めて、外国人は2割くらいやな。日本人と外国人が一緒になって支えとう産業やったわけやな」

新長田駅には、快速電車は停まらない。しかし、朝の普通電車が新長田駅に停車すると、その後の列車の中はがらがらに空いたと、F氏は話した。従業員として多くの人を集め、経済的効果を神戸の町にもたらしていた産業が、ケミカルシューズ産業であった（*4）。

家業世襲と長田定住の「理由」

ところが、1977年（昭和52年）、長田の町は「円高ドル安」による不況に見舞われる。「私が中学1年の頃ですわ。あの時のことは、今でも鮮明に覚えてますよ」C氏は、その時の光景をこのように語った。近所の工場が、次々つぶれていった。輸出が大打撃を受けたために、ケミカルシューズ産業は内需転換を余儀なくされる。それまで目にする事のなかった「できあがった靴」が、工場の外で安く売られるようになった。「運動靴が、1000円。当時でも安い値段でしたよ」

C氏はまた、不況当時、長田の町で、火災が冬の「風物詩」となっていたことについても語った。「1977年から3年間くらいは、年末になると、毎年火事ですわ」火災保険を狙って、経営に行き詰まった工場主たちが、自分の工場に火を放っていたのだという。ケミカルシューズ工場は可燃物を多く取り扱うために火の回りが速く、阪神大震災と同じように、林立する周囲の住宅にも被害が及んだ。木造の長屋群が火の海に飲み込まれる。「火事のたび、毎回、犠牲者が何人か出てましたねえ。僕らよく見に行きましたよ、『また火事やー！』って」

日本人は、一度失敗すると、建て直しに慎重になる。しかし、在日コリアンの人々には、「一度だめになったなら、次のチャンスに再び賭けてみよう」というバイタリティがあった。元来、ケミカルシューズ産業は投機的な性格の強い産業である。サンプルの靴が時代の流れに合い、爆発的に売れば、大儲けができる。その儲けで借金を清算することがで

きるため、在日コリアンの人々は、一度や二度の経営の失敗には怖じないというのである。工場に火を放つとは大胆な方法ではあるが、彼らは下りた保険で再び工場を立て直し、次のチャンスに賭けては、長田の産業界を生き抜いていった。

「コリアンは、たくましい」。阪神大震災後のケミカルシューズ産業の復興、あるいは長田の復興に関し、マスコミはそのような表現を用いて在日コリアンの人々の活躍を賞賛した。しかし、C氏はこう語る。

「『たくましい』かな？ ほめていただくと、それはありがたいですね。ただ、『たくましい』というよりは…。僕ら（在日コリアン）は、仕事なくなっても（国籍を理由に）他の仕事を新たに探すのが難しいでしょう。せやから（工場を立て直してでも、ケミカルシューズ業界の中で）なんとか食べていかなあかん、ゆうことでしょうね。みんな、生きるのに必死なんですわ」

ここで、なぜケミカルシューズ産業が在日コリアンの中で2世、3世へと受け継がれていったのか、その背景を、ヒアリングから考察してゆきたい。C氏の言葉は、長田のケミカルシューズ業界において、在日コリアン2世、3世の多くが、長田を離れず、先代の工場を継いで経営者として活動している理由を、端的に表している。現在では在日コリアンが日本の民間企業に就職するケースも増えているが、高度経済成長期やそれ以降しばらくの時期は、日本の民間企業に在日コリアンたちが就職することは非常に困難であった。

また、公務員への就職に関しても、「国籍条項」が存在していた（*5）。現在でも、「日本人中心」の企業社会の中で、社長や管理職といった要職に就くことは、いまだ困難な状況にある。しかし、創成期よりコリアンが多く携わっている長田のケミカルシューズ業界でなら、富や名声を築き上げ、在日社会の中で高い地位に立つこと、あるいは地域社会に発言力を持った人物になることは、そう難くない。それは、在日コリアンたちが、長田の町において、地域の産業の重要な担い手として社会的に認知されているからである。

「やむを得ない社会事情」と「可能性のある長田の環境」のはざまで、長田のコリアンたちはケミカルシューズ産業を引き継ぐ道を選んでいった。

C氏と同じく、腕塚町で生まれ育った在日コリアン2世のG氏も「高校を出た後、仕事を探そうとすると、長田の在日コリアンや（被差別）部落出身の若者、特に女性は、就職差別に遭っていた。しかし、地元のケミカルシューズ業界が仕事を与えてくれた。長田のケミカルがここまで成長することができたのは、つらい長時間の作業に耐えた在日コリアンや部落の女工さんたちのお蔭や、って言われてるよ」と語る。また、G氏は長田の在日コリアンの「横のつながり」の強さについても語った。「誰々さん、と名前を聞いたら、大抵顔は知ってるし、少なくとも名前だけは一度でも耳にしているよ」（*6）

長田に暮らす在日コリアンたちの親戚が、日本の他の集住地区に住んでいるというケースも、珍しくはない。C氏には、東京都足立区で暮らす親戚がいる。足立区は東京都内で最も在日コリアンの人口が多い地域の一つである（*7）。「いとこの家の隣に、コリアンの飴屋さんがおりました」C氏は親戚の家を訪ねた後、朝鮮の食料品店・物産店が連

ねる、JR 三河島駅（東京都荒川区）周辺に立ち寄るといふ。「美味しい腸詰めの店があるんですよ。必ず買ってから、長田に帰ります」（*7）

多くのコリアンたちが集住地区から動かず、2世、3世と暮らし続けるのは、彼らが、日本と朝鮮の文化の入り混じった独自のコミュニティに、日本人ばかりの社会よりも生活や仕事の「やり易さ」を覚えているからであることも、大きな要因となっているのであろう。ところが、あえて「在日コリアンばかりのコミュニティを抜け出したいと思い」、長田を離れる人々も存在したという。その傾向が、高度経済成長期以後の長田において、ケミカルシューズ産業の衰退を早めたとも考えられる。長田の町の人々の目には見えない緩やかなペースで、斜陽産業化を始めたケミカルシューズ。その衰退に「決定打」を与えてしまったのが、1995年（平成7年）に神戸を襲った、阪神大震災であった。震災がケミカルシューズ業界に与えた影響は大きく、「顔」である地場産業を崩された長田の町は、急速に活気を失っていった。その詳しい事情と背景については、本節と同様、ヒアリングで得た在日コリアンたちの体験談を中心に、次節で詳しく述べてゆきたい。

注：

（*1）2003年10月17日実施 C氏へのヒアリングによる。

（*2）2003年11月20日実施 C氏・D氏へのヒアリングによる。

（*3）2003年12月9日実施 E氏へのヒアリングによる。

（*4）F氏の言葉はすべて、2003年12月9日実施のヒアリングによる。

（*5）参考文献：仲原良二『在日韓国・朝鮮人の就職差別と国籍条項』1993 明石書店。

（*6）2003年10月17日実施 G氏へのヒアリングによる。

（*7）平成15年10月1日現在、東京23区内において、足立区の韓国・朝鮮人人口は9237人で、新宿区の10965人に次ぎ第2位。第3位は荒川区の7249人。足立区・荒川区は在日コリアン1世からのオールドカマーの集住地として知られるが、近年、ニューカマーの増加が続く。

（*8）C氏の言葉はすべて、2003年10月17日実施のヒアリングによる。

第3節 阪神大震災を経て 地域産業再生と長田コリアンのこれから

緩やかに下降線をたどるケミカルシューズの生産量

表1は、1980年(昭和55年)から、阪神大震災が発生した1995年(平成7年)までの、長田区内におけるケミカルシューズの生産足数の統計である。

表1 長田区ケミカルシューズの生産足数の推移(1980年 - 1995年)

年次	生産足数(万足)	前年比	年次	生産足数(万足)	前年比
1980年	3890	90.5%	1988年	4382	102.3%
1981年	4602	118.3%	1989年	4536	103.5%
1982年	4563	99.2%	1990年	4475	98.7%
1983年	4523	99.1%	1991年	4087	91.3%
1984年	4749	105.0%	1992年	3435	84.0%
1985年	4740	99.8%	1993年	3228	94.0%
1986年	4402	92.9%	1994年	3131	97.0%
1987年	4284	97.3%	1995年	1416	45.2%

(日本ケミカルシューズ工業組合調べ)

1970年代にドルショックが長田の町を襲った後、ケミカルシューズの各工場は、輸出向けの靴製造から国内向けの靴製造へとすばやく転換していったため、産業そのものは持ち直した。しかし、表1からは、その後、長田におけるケミカルシューズの生産量が、前年とほぼ変わらない、あるいは微減しながら推移を続けていることがうかがえる。その大きな理由は、安価な海外産の靴の輸入が増加したことにある。ケミカルシューズ産業の停滞が続いたこの時期に、長田では商店街の衰退、人口減少、そして高齢化など、いわゆる「インナーシティ現象」がゆっくりと進行していた。

A氏は、在日コリアン1世の父親からケミカルシューズ産業を引き継いだ。父親の死後、12歳で職工として靴作りに携わるようになった。ケミカルシューズ産業が長田の町で産声を上げて間もない1955年(昭和30年)のことであった。現在は息子と共に靴底製造の工場を営んでいる。彼は、この時期の生産量の下落と、それらが長田の町に与えた影響について、こう語った。

「ドルショック、オイルショックで輸出が打撃を受けたあと、生産足数は一気に減ったけど、それでも、メーカーは一斉に国内向けの生産に転換して、なんとか持ち直した。生産足数は毎年一割くらいのペースで減って行って、ケミカルシューズ業界としては少し苦しくなったけど、それでも、長田の町全体で考えれば、まだなんとかやっつけていける、そんな感じやった。せやから、町の人々の目には、ケミカルスの衰退は目に見えてなかったんやね。ケミカルがなくなってしまったら、長田の町はどないなってしまうんやろか。そんなこと、

誰も想像できひんかった。せやけど、震災が起こって、それが現実として見えてきてしまった」

空洞化をはじめ、少しずつ活力を失っていったケミカルシューズ業界、そして長田の町を突き崩すかのように訪れたものが、阪神大震災であった。

震災で見えた、在日コリアンコミュニティの問題点

1995年（平成7年）、長田の町を阪神大震災が容赦なく襲った。木造の長屋群やケミカルシューズの工場のあるところから火が上がり、町は瞬く間に火の海に包まれた。長田区内の死者は919人、家屋倒壊率は57.3%（数字は長田区役所調べ、1998年）にもものぼった。

JRの線路の両側に広がる黄色や赤の地域が、長田区のケミカルシューズ工場の集積地であった。これほど多くの被害が発生した背景には、第1章で追って行った、長田の下層社会としての歴史が挙げられるのではないだろうか。それに加え、長田の都市整備は長い間おざなりにされてきた。市内一の人口密度は、長田のスラム化、戦前から戦後にかけての人口増加と過密がもたらしたものであった。番町地区の住宅は、市営の高層住宅に改築されており、その地域での被害拡大は防がれた。しかし、新長田駅以南の木造長屋群の住宅は、長い間改善を施されぬままであった。そうした歴史の積み重ねが、長田の死者の増加をもたらした。その被害者の中に、祖国を離れ、長田の町の発展の礎を築いた、在日コリアン1世の老人たちがいた。

「『ケミカルで一発当てたら、（隣の区の）須磨に立派な家を建てる』っていうのが、当時のコリアンのステイタスやった。高度経済成長期に、長田のコリアンたちは次々に町を離れて、須磨や、あるいは西区、北区にできたニュータウンに引っ越して行った。だから、あなたのご出身の須磨にもコリアンが多いんです。1世の人たちは、長田のコリアンのコミュニティから息子たちを“脱出”させて、ケミカルも継がせなかった人もいた。それは、息子たちに、自分らの受けたような差別を体験してほしくなかったから。息子やその子どもたちは、長田のコリアンコミュニティを離れた日本人社会の中で、通名（日本風の苗字と名前）を使って溶け込んでいる。あなたの実家の周りのコリアンの人で、本名を使っていた人、いなかったでしょう。震災で亡くなった長田のコリアンの多くが、一人暮らしの1世のハラボジ（おじいさん）やハルモニ（おばあさん）やったんです」長田区に生まれ育った在日コリアン2世の女性、Hさんは、そう話した。

こうした長田の在日コリアンたちにおける高度経済成長期以降の動きや考え方は、コリアンたちのケミカルシューズ離れをも意味している。先述の通り、在日コリアンたちが長田の地に2代、3代にわたって定住し、ケミカルシューズ産業を親の代から引き継いでいる背景には、国籍による差別から日本の民間企業への就職が困難であったこと、創成期よりコリアンが多く携わっている長田のケミカルシューズ業界でなら、冷遇されることも少なく、日本人のみの企業社会よりも「出世」が容易であることなどが挙げられた。「やむ

を得ない社会事情」と「可能性のある長田の環境」のはざままで長田のコリアンたちが選んだのが、ケミカルシューズ産業だったのである。

先程のF氏の言葉の通り、ケミカルシューズ業界は、必ずしも在日コリアンたちのみによって形成されている業界ではない。それでもケミカルシューズ業界が「在日産業」の代名詞のひとつとして現在でも語られているのは、在日コリアンによる世襲が多いためであろう。家業を継ぐこと、同胞の多い業界で生計を立ててゆくことは、日本人コミュニティからの差別の、数少ない「エスケープルート」であったともいえよう。しかし、ケミカルシューズ業界という、在日コリアンの人口の方が上回る業界に身を置くことで、彼らはまた「ケミカルの人、在日の人」というカテゴリーにくぐられ、偏見を抱かれる。こうしたカテゴリーから脱出したい、あるいは子どもたちは脱出させてやりたい、そんな思いが、ケミカルシューズ業界に携わる一部の在日コリアンの中にはあったのではないだろうか。「日本社会の中でのなるべく差別されないように」と、彼らは息子たちにしっかりと教育を身に付けさせる。大学を卒業させ、可能ならば日本の民間企業に、高度な学識を身に付けたならば弁護士や医者、薬剤師になってほしいと願う。ケミカルシューズで利益を上げたなら、靴作りの「現場」からは手を引き、貸ビルや貸工場など、不動産業に転換する。つらい労働者時代の記憶を残す靴作りに、「在日の代名詞」のような靴産業に、わざわざ子どもたちを携わらせることはない。他の仕事に就かせることができるのなら、そうさせてやりたい。それができないから、ケミカルを継いできた、あるいは継がせてきた...そんな在日コリアンたちの「本音」が、今回の執筆、ヒアリングにあたって浮かび上がってきた。事実、今回出会った在日コリアンの人々の中にも、皆長田出身で、家族や本人がかつて一度は何らかの形でケミカルシューズ産業に携わったが、今はそうではないという方が多かった。

A氏は、その事情をこう語った。「長田のケミカル産業はコリアンと日本人によって支えられてきたけれど、例えば、日本人の経営者の方が、ケミカル産業をコリアンたちと一緒によくしていこう、とは考えていても、コリアンたちだけがよくなるようにしよう、とは決して考えていないわけでしょう。ケミカルの中で、やっぱり自分たちの生活、自分たちのいる業界がよくなることを願っているわけですから。それは他の業界でも一緒やと思います。始めは半々やった日本人とコリアンの(ケミカルシューズ業界における)割合が、だんだんコリアンの方が増えているというのは、分かりますよね。コリアンの場合、『ケミカルを続けてゆくしか道がない』という事情を皆抱えていた。ところが日本人の場合は、息子は大手の民間企業にでも就職させられる。ケミカルでないとかん、って理由がないんですよ。コリアンの場合は、そうはいかなかった。一部の成功者は、研究者になったり医者になったりして別の産業に就くことができる。ケミカルで儲けた会社は、靴を作るのをやめて、組合からも脱退し、土地貸しや工場貸し(不動産業)で収入を得て食べてゆける。息子たちには違う職業を勧める。そういう道を選べなかった残りのコリアンが続

けているのが、今の長田のケミカル産業です。衰退産業ってことは目に見えてますから、望んで続ける人はほとんどいない。生活のために続けている、という人がほとんどです」

在日コリアン2世のI氏は、長田のコリアンコミュニティにおけるケミカルシューズ産業の存在を、こう位置づけた。「ケミカルシューズ業界の中で、コリアンたちが決して優遇されてきたわけではないんです。国籍条項や就職差別を背景に、コリアンたちが同胞と共に勝ち取ってきた『生きるための道』が、ケミカルシューズ産業やったんです」(*1)

あきらめない強さと、ためらう思い

それでも、あきらめなかったコリアンの工場主たちもいた。「若いときの苦労に比べたら、震災はどうということない。親の働きを見て育った長男も、家業を続けると言うてくれる。再起するしかない」と、靴底工場を営む在日コリアン1世の岩本慶二氏は語っていた(*2)。震災で大きな痛手を受け、いよいよ長田のケミカルシューズ業界も終わりかた、日本各地の問屋が中国などの海外製品に目を向けた。しかし、今までどんな不況に見舞われてもその度に這い上がってきたのが長田のケミカルシューズであった。その「不屈の精神」を信じ、彼らが立ち上がるまで目をつぶっていよう、と、問屋たちは長田ケミカルシューズ業界の再生を待っていたのだと、A氏は話した。

問屋の信念は、間違っただけではなかった。驚異的な速さで、長田各地の靴工場は生産ラインを復旧させた。歌手の安室奈美恵さんが履いていたストレッチブーツが1997年(平成9年)に全国で爆発的に売れたことも、長田の靴産業の復興を手伝った。

E氏の工場も被害を受けた。しかしE氏は、同じく被災した在日コリアンの同業者へ呼びかけ、神戸市が創設した被災中小企業への低金利融資制度(*3)を利用したケミカルシューズの工業アパートの建設に漕ぎ着けた。在日同胞による商工会の会長を務めるE氏が、市の厳しい適用条件をクリアする企業を探し出し、最終的に、E氏を含めた5社で、協同組合を1997年(平成9年)に結成した。この制度の適用を受けることのできた長田のケミカルシューズ業者は、E氏らの協同組合のみであった。

「適用条件がとにかく厳しかったんですよ。長田のケミカルは、家族経営の零細企業ばかりやったから、借金の面や設備の面などで、なかなかクリアできないところが多かった。(日本ケミカルシューズ工業組合の)組合員も、震災後半減したし、従業員も半減しました。どこの会社も、立ち上がるのが難しかった」と、金氏は、ケミカルシューズ工場の復興の難しさ、業界を巡る厳しい状況を振り返った。

そのような状況の中で、E氏らの協同組合は長田ケミカルシューズ業界の「希望の星」となりえたのではないだろうか。ところが、

「ほんまに、今の(長田ケミカルシューズ業界の)見通しは暗いんですよ。不景気で、中国の製品がどんどん輸入されて売れてゆく時代でしょう。バーゲンで安売りをして、今じゃほとんど売れないですよ。量より質の時代、値段は多少高くても、付加価値のある靴、長く使ってもらえる靴を売ることが大切になってる。当然、売れる足数は減ってきますよ。

それに今、問題になっているのが、関税率の引き下げ。2005年から、皮革製品や靴の関税がフリーになるという話し合いがFTA（自由貿易協定）でされとる。今まで、皮革産業や靴産業は同和対策（*4）のために、貿易協定の話し合いの度に、何とか保護され続けてきた。せやけど、今はもう、自由化するをやむをえない状況になっている。これから日本の製造業、零細企業は、どんどんあかんようになっていきますよ。日銀短観で景気が底打ちになったとか、好転の兆しが見えてきただとか言うてますよね、あんな嘘ですわ。どこが景気回復や、と。ほんまに今の零細企業を見て言うてるのか、と思いますよ」とE氏は、現在の状況に対するやりきれない思いを打ち明けた。

震災以後の復興の立ち遅れは、全国的な不況や輸入靴の増加も大きく影響している。ストレッチブーツの流行は一時的な「震災特需」を長田の町にもたらしたが、町や業界全体の再活性化を持続させるほどの力は持っていなかった。

長田のケミカルシューズ業界で、先陣を切って復興へ乗り出したE氏たちであったが、ケミカルシューズ産業の将来に対し、閉塞感を隠しきれないといった様子で、「在日産業」の将来を案じた。

「もう、長田の在日の仲間が、寄ると触ると『何しよう？』、そればかりですよ。在日の産業がいま、全部あかんようになってもうた。ケミカル（シューズ）はこんな状態で、先が見えへん。土木業は震災後は頑張ったけど、不景気で今は仕事がない。くず鉄屋さんや転業や廃業ばかりやし。そうすると、これから長田の在日はどないして生きて行ったらええのか、次に何の産業を興すべきなのか、いろいろ考えるんやけど、なかなかあ。焼肉屋、飲食店…。ケミカルから転換して、この辺りでも増えましたよ（*5）。あと、バイタリティのある在日の仲間で、これからはペット関連の産業はどうや、とか、高齢化やから福祉関連のサービスを始めるんはどないやと、言うったもんもおりますわ。今、増えとるみたいですよ、在日で福祉の商売を始める人。せやけど、私らももうトシやし、なかなか新しいことに踏み切る勇気も持たれへんのですよ」（*6）

ケミカルシューズ産業が長田の地に興った頃の1952年（昭和27年）に設立された、朝銀が破綻した（*7）ことも、在日コリアンの工場主たちに打撃を与えた。資金の借入のための金融機関として朝銀を利用していた者も多かったためである。

震災後の混乱と苦難を経て、工場をなんとか再建した。しかし、長田のケミカルシューズ産業が、今後生き残ってゆけるのか、長年靴作りに携わってきたコリアンたちは不安を隠せないようである。

「ケミカルシューズに代わる、新しい地場産業を」

「ケミカルがあかんようになってしまった時のことを真剣に考えなあかんと、震災の10年ほど前から、コリアンの仲間うちでは話をしとったんですよ。ケミカルに代わる新しい産業を、長田の町に作っていかなあかん、と」とA氏は語った。ケミカルシューズが長田の町で一大産業に育ったのは、戦前、貧しいゴム職工として下積みで耐えてきた先代のコ

リアンたちの努力があったためである。今度は、2世の自分たちが、生まれ育った長田の町を再び元気にするために何かできないだろうか。そんな提案を、A氏たちは持ち寄って話し合っていたという。

「ケミカルに見切りをつけて、震災後は、工場の敷地を利用して飲食店をやるコリアンが増えた。まさか、震災前の日本で、中国がこんな経済大国になるなんて、誰が想像したでしょう。いまやその中国に日本の靴は大打撃を受けてしまっている。長田の町からも人がどんどん出て行ってしまった。家が壊れて、西区や北区のニュータウンに避難した、かつての内職の貼り子さん、ミシン工の人たちの多くが長田に戻ってこなかった。ケミカルはもうあかん、と。今の長田のケミカル産業で、復興ムードがずっと盛り上がりまなも、それが原因です。ケミカルが元気ないから、長田にも元気がない、そう言われ続けて。5年かけて復興、それが町の合言葉やった。5年我慢すればええんや、5年なら我慢できる。せやけど、5年で復興はできひんかったでしょ。5年たったけど、長田の町はなかなか元気にならんし、ケミカルはしぼんでゆく一方。仕事が、暇で暇でしゃあないですわ。それで、長田の町に新しい産業をつくっていかなあかん、という話を持ちかけたんです」

A氏のこの提案が、次章で取り上げる「アジアタウン構想」へと膨らんでいったのである。

注：

(* 1) 2003年11月21日実施 I氏へのヒアリングによる。

(* 2) 門野隆弘「工場も家も失ったケミカル業界」 酒井道雄編『神戸発 阪神大震災』岩波書店 1995 p.108より抜粋。

(* 3) 「災害復旧高度化資金融資」制度による。1社あたりの融資限度額は5000万円。この特例を受け、E氏は事業費の9割に当たる約6億円を、無利子・5年据え置き・20年以内償還という好条件で借り入れた(資料提供：朝鮮新報社ホームページ <http://www.korea-np.co.jp>)。

(* 4) 皮革産業や靴産業は、同和地区における主産業であった。学校を卒業すると、こうした「地場産業」に従事するケースが、全国各地の同和地区において見られた。番町地区の人々が「貼り子さん」として多く従事していた長田のケミカルシューズ産業も、「同和対策産業」の一つに数えられるものであろう。

(* 5) 朝鮮新報社ホームページ(<http://www.korea-np.co.jp>)によると、長田区内の在日コリアンによる飲食店経営は、震災前の約100店舗から、ピーク時の1995年(平成7年)夏には約300店舗まで膨れ上がったという。ケミカルシューズ産業等、本業で再起の活路を見出せなかったことが最大の要因とされる。

(* 6) E氏の言葉はすべて、2003年12月9日実施のヒアリングによる。

(* 7) 1997年(平成9年)5月、全国の朝銀に先駆けて朝銀大阪が破綻。その半年後の11月、朝銀大阪は近畿地区の5つの朝銀(滋賀、奈良、和歌山、兵庫、京都)と統合され、朝銀近畿が発足。しかし2000年(平成12年)12月、朝銀近畿も破綻した。参考資料：「朝銀って何? 公的資金って何?」ホームページ(<http://chogin.parfait.ne.jp/history.html>)

第3章 コリアタウンから多民族共生のまちへ

- 「アジアタウン構想」の紆余曲折

第1節 「アジアタウン構想」とは何だったのか

はじめに

「長田に、“アジア”を核とした新たな産業を。」

長田生まれ、長田育ちのある在日コリアン2世の靴底職人が、そんな提案をした。

その提案は、長田に暮らす在日コリアンたちと地元日本人住民、さらに行政や全国各地の学識者、マスコミ、ボランティア等を巻き込み、「アジアタウン構想」として長田の町に大きなうねりをもたらした。しかし、構想に掛けるそれぞれの思惑が交錯し、すれ違い、衝突した結果、同構想は、計画半ばで中断するという不本意な「結末」を迎える。

構想に関わった在日コリアンたち、またその周辺の人々は、どのような思いを構想に描き、そして動いたのか。なぜ、構想は頓挫してしまったのか。本章では、「アジアタウン構想」に関する諸々の活動がなされた、1995年（平成7年）から2000年（平成12年）にかけての約5年間を中心に、ヒアリングや関連資料から考察を進め、「多民族共生」の理想形であった「アジアタウン構想」の実現を困難にしたものはいったい何だったのか、地域の抱える問題、それぞれの立場や構想に対する考え方の相違点に着眼しながら、多民族コミュニティにおける在日コリアンたちの「未来」について考えてゆきたい。

きっかけは「 코리아タウン」構想

「アジアタウン」構想の中心的メンバーは、長田で生まれ育った在日コリアンたちであった。計画が中断した後、彼らはそれぞれ、在住外国人支援のための活動に携わったり、ケミカルシューズ産業など個々の本業に専念したりしている。

「長田の町を、在日コリアンをはじめ、マイノリティにとって暮らしやすい町にしたい。」そんな願いを彼らは持っていた。

「アジアタウン構想」の発案者であるA氏は、構想の生まれた動機を、次のように語った。

「元々は、民団（在日本大韓民国民団）の西神戸支部の有志で、 코리아タウンを長田で実現できたらええね、という話を、（19）85年くらいからしとったんです。ちょうど、鶴橋（*1）が自然発生的に 코리아タウン化した頃で、川崎駅周辺のコリアンの集住地区でも、 코리아タウンをつくろう、っていう動きがあって、その影響でした。ケミカルシューズ産業にもだんだん陰りが見えてきた頃で、長田に新たな産業を生み出してまちを活気付けたい、という話をしていて、 코리아タウンやったら長田にその土壌はできあがってる、あつという間につくれるやろ、と話してたんです」

そして彼は震災後、「長田に 코리아タウンを」といち早く神戸市に提言をした。

「コリアタウンの話が出てきたんは、ケミカルの先行きが怪しくなったから。それまで、長田のコリアンといえば皆、靴（作り）やった。物販や飲食をやるよりも靴が圧倒的に主流やったんです。靴で稼げるから、そんな話は出てこんかった。それが、コリアンの生活を支えてきたケミカルが、震災で一気にだめになってしまった。ケミカルを復興せなあかん、せやけど、10年後20年後、ほんまに長田がケミカルだけでやっていけるんやろうか。それで、新たなまちの産業を考えていくにあたって、『アジアタウン』が復興の計画にあがったんです。元々は、コリアタウンをつくりたいという計画やった。せやけど、コリアを出すのはまずい。やっぱり地元の反発があるやろ。それなら、アジアでどうやろか、ゆう話になったんですね。長田にはコリアだけやない、ベトナムや中国の人もおる。いろんな外国人が生活しやすいまちをつくってゆきたいし、いろんな国の人が集まっているということをPRしていこうと。これからはアジアが伸びる。アジアを打ち出したまちづくりをしよう。南京町（神戸の中華街）のような通りを長田にもつくれたら、とか、いろいろ話をしてました。そんな話をしとったら、長田が震災で大きな被害を受けて、ケミカルも大きな損害を受けて。長田の復興のために何か対策はないかと話していた時、ちょうど、笹山（幸俊・前神戸市長）さんが、各区の代表の区民とまちの復興について話し合う機会を持たれたんですね。それで長田からの代表の一人として私も参加して、アジアタウンを長田につくるのはどうでしょう、という話を直接持ちかけたんです。当時、神戸市は『上海長江交易促進プロジェクト』という大きな計画に力を入れていて、神戸とアジアの交流をめざすという点で、私らの案と神戸市の思惑が一致したんですね。それで、笹山さんが乗り気になった。アジアやから中国も含む。これがコリアに限定されとったら、（市の協力は）あかんかったでしょうね」

「アジアタウン推進協議会」の発足

活動の核として想定された地区は、JR新長田駅北部に位置する、A氏も工場を構える長田区細田町と、隣接する神楽町であった。ここに、地場産業であるケミカルシューズ産業をPRしたり、「産地直送価格」で市価より安く靴が手に入る商業施設を作り、その周辺に、アジア色の濃い飲食店や雑貨店の立ち並ぶ商店街を作ることが提案された。

A氏は、経営する靴工場の一室を、震災復興の話し合いの場として提供した。震災復興や「アジアタウン構想」に関心を持った学識者たちが中心となり、震災から4ヵ月後の1995年（平成7年）4月、「長田の良さを生かしたまちづくり懇談会」が発足した。この懇談会のなかでは、アジアタウン構想に関しても議論が交わされ、そこでの話し合いが、翌年1月の「アジアタウン推進協議会（以下、協議会）」設立へとつながっていった。また、この会から「長田の震災復興を励ましに、“寅さん”のロケ地として長田を選出してもらえないだろうか」との案が生まれ、その結果、映画「男はつらいよ・紅の花」のロケを長田に誘致することに成功した。この映画のエンディングでは、主人公である寅さんが長田を訪れ、被災地の人々を励ますシーンが流れた。

協議会では、「アジアタウン構想を住民にPRするイベントを定期的に行っていこう」など、今後アジアタウン構想を実現してゆくにあたってどのようなことを実践すべきか、様々な話し合いがなされた。長田の在日コリアンたちを中心に、次々に構想に賛同する人々が集まった。その結果、発足から約半年後の7月には、協議会主催で「くつのまち長田アジア自由市場」というイベントが開催された。このイベントには延べ17000人を超える人々が集まった。一連の協議会の活動はマスコミにもこぞって扱われ、「アジアタウン構想」は全国的に広く知られることとなった。アジアタウン実現に向けた機運が一気に高まり、地域住民にも「アジアタウン構想」をアピールすることができたかのように見えた。ところが、地元住民を中心としたまちづくり団体は、協議会の「定期的にこのイベントを開催したい」との提案に、ゴーサインを出すことはなかった。

協議会の先頭に立って活動してきたA氏は、イベントの直前、自社工場の再建に専念するため、代表の役割を鷹取教会のJ氏にバトンタッチしている。

ボランティアの目から

長田区南西部に位置する鷹取教会は、震災後、在住外国人の支援ボランティアの基地として、多くのボランティアを集め、また、その活動は全国的な注目を集めた。その教会の代表であったJ氏が協議会のリーダーを務めるようになると、アジアタウン構想には、在住外国人支援関連のボランティアたちが多く関わってくるようになる。

ここで、立場の違いから、構想に対するそれぞれの思惑の違いが浮かび上がってくる。産業や商業による地域の活性化をメインに置いて構想を練っていた、A氏を中心とするケミカルシューズ業者に対し、生活支援を主な活動の中心に据えるボランティアたちは、「在住外国人のための住環境の整備」をメインに置いて構想に取り組んでいた。商業の再活性化と住環境の整備、その2つが融合して理想的に話し合いが進められてゆけば望ましかったであろう。しかし、活動に対するスタンスの違いから、ヒアリングで直接伺うことはできなかったが、業者とボランティア、あるいは地元住民と業者、地元住民とボランティアの間のどこかに、様々な意見の食い違いや対立が存在していたのではないかと思われた。

「長田は戦前からコリアンの多い町でした。沖縄や奄美大島の人間も多い町でした。でも、長田にそれらの民族色がうかがえる場所があるかといえばそうではなかったし、民族料理店なども、大阪の生野や東京の大久保などに比べれば、今だってほとんどないでしょう。つまり、どういうことかわかりますか。長田のマイノリティたちが自らのアイデンティティをひた隠しにしながら生きてきた。町がそういう環境やったからなんです」

長田区で在住外国人支援のボランティアに携わるK氏は、そのように話した。彼は、長田が今まで「コリアタウン」となりえなかった理由について、在日コリアンたちが、マジョリティである日本人の社会に溶け込もうと、つとめて「朝鮮人」のアイデンティティを隠しながら生きてきたがために、長田の町並みはコリアンのおいがないものとなったからである、と考えている。在日コリアン1世の支援を中心に、在日外国人の支援ボラン

ティアに長年携わってきたK氏が、構想の中に描いていた理想図は、「在住外国人にとって暮らしやすいまちになる」長田の姿であった。

ここで、「FMわいわい」について触れておきたいと思う。神戸における在住外国人支援の活動を語るのに、「FMわいわい」の存在は欠かせない。「FMわいわい」とは、1995年（平成7年）7月、長田の在日コリアンを対象にしたミニFM局と、長田の在日ベトナム人を対象にしたミニFM局とが合併して、鷹取教会に開局されたコミュニティFM局である。それぞれのFM局の放送は、震災発生から間もない頃に始まり、被災した同胞たちを音楽やトークで励ました。また、被災者に必要な生活情報を、母国語と日本語、その他の多言語で伝えた。「多民族共生の実現を、定住外国人の多い長田から発信しよう」という目的のもとに作られたのが、FMわいわいであった。運営には、鷹取教会に集ったボランティアスタッフが関わっていた。

「アジアタウン構想」へ向けた活動には、このFM局も深く関わっていた。開局当時から、中心メンバーとして運営に携わっていた在日コリアン2世のHさんは、「アジアタウン構想」への「FMわいわい」の関わりと、活動を振り返って、以下のように語った。

「それまで、長田には在住外国人こそ多かったけれど、それを支援する組織はほとんどなかったんですよ。それが活発になったのが震災以降ですね。民族色の濃いイベントがあちこちで催されるようになったのも震災の後から。『わいわい』は、長田には日本人以外にもこんなに外国人がおるんやで、こんな活動しとるんやで、一緒に助け合おうよ、という情報を伝える存在にしたかったんです。在日の問題にしても、お互いを知らないから、差別って生まれてくるんですよ。例えば、キムチって見た目はなんや臭いし赤いし、美味しなくなさそうやけど、いざ食べてみたら意外と美味しい。お米にも合うし、ピザの具にもなる。それが『異文化交流』なんです。『食わず嫌い』が差別を生むけれども、それを思い切って知る努力をしてみると、意外と楽しいぞ、と。『わいわい』は、そういう外国人たちのコミュニティの存在を広めることができたという点では、貢献できたんじゃないかな。民族を問わずに、一緒に苦難を乗り越えることで、以前より日本人と外国人との協力の輪は広がったと思いますよ」(*2)

行政の思惑、そして失敗

この間、地元の復興計画や区画整理の話が優先的に進み、アジアタウンへ向けた動きはいったん止まったかのように見えた。ボランティアたちが中心になって進めるようになった一連の「アジアタウン構想」に関する活動は、生活支援を軸に動いていった。

そのような折の1998年（平成10年）1月、かねてよりアジアタウン構想に関心を示していた神戸市は、「アジア文化交流タウン構想」を発表した。「南京町」をイメージし、集約換地によりアジアの食材店、飲食店、物産店などを集め、アジア各国のストリートを作り、その入り口には各国を象徴する楼門を置くといった構想である。そして、市の構想に地元が賛同する意思があれば、市所有地にアジアタウンの先導的役割を果たす、「パイロ

ットショップ」の建設地を提供するなどして、支援を行っていく姿勢を示した。この市の構想に対し、地元住民によるまちづくり団体の方からも、「アジアギャラリー構想」が提案され、「日本の靴生産の過半を占め、アジアを中心とした在日外国人がまんべんなく混住して住み、多様な文化が潜在している地域である長田の特徴を積極的にプラスイメージとして、まちづくりの資源に活かしたい。」という意思が表明されたのである。

しかしここで、協議会と地元住民との間で対立が生じた。協議会のイメージする施設案に対し、地元住民たちが難色を示したのである。理由は、「アジアタウン」を色濃く打ち出すことが、長田に対するマイナスイメージを及ぼすことであった。さらに、行政や地主との調整にも食い違いが生まれた。A氏ら地元工場主の描いていた「地場産業のケミカルシューズを安価で販売し、産業を紹介する施設」は、大手靴メーカーが定価で靴を提供するのみの施設に変更された。工業地帯で靴を安価で販売することが、神戸の中心街における靴の売れ行きを鈍らせ、その結果全国の流通網から神戸のケミカルシューズが「避けられて」しまうことを危惧した、大手靴メーカーからなる日本ケミカルシューズ協同組合の意向によるものであった。「組合を説得させられなかった。結局、自分らの復興で（メーカーの多くは）かかりきりなんですわ。長田の将来のこと、ケミカルの将来のことを、真剣に考えてくれる人が、少しでも上におったら、それだけで違ったのに…孤軍奮闘でしたわ」A氏は、苦笑いして語った。

民族料理店の出店は、防火面への不安からテナント主に拒まれ、結局、雑貨店のみテナントに入れる『アジアギャザリー神戸』という施設を作ることで合意した。

こうして、「結局、駅前の土地の買収やらでいろいろもめて、“間に合わせ”のような形で、あの『シューズプラザ』ができた」。Hさんはこう語る。「あの場所を、アジアタウン構想の拠点として、ハード面で充実させる予定だった。ここを基地として、構想をどんどん発展させようと。ところが、結局は協議会で話し合った内容がまったく反映されない施設ができあがってしまった。『アジアギャザリー』も、オープン当時に入っていたお店はみんなつぶれて。かわいそうな状態になっているでしょう」

そうして2000年（平成12年）の夏、ケミカルシューズ産業のPR施設として『シューズプラザ』がオープン。その1年後には、雑貨店が入居した『アジアギャザリー神戸』がオープンした。しかし、地元の盛り上がりはいまひとつで、施設の特長やコンセプトもわかりづらいものであったがゆえに、両者共に周辺地域の客をほとんど集めることができていない。行政は、一連の「アジアタウン構想」から撤退した。長田区マスタープランの中に「アジアタウン構想」という言葉が今でも残っているが、区役所の窓口にお問い合わせたところ、その場の職員は誰も詳しい内容を知らない様子であった。アジアタウン推進協議会も、2000年（平成12年）を最後に活動を停止している。

Hさんは、どん詰まりになった末の、行政の「アジアタウン」構想からの撤退を、「外国人が中心になったまちづくり活動を、行政が信頼していなかったから」と話す。民意を排除した『シューズプラザ』のオープンもその表れであるという。あれほどマスコミや全国

からの注目を集めながら、なぜに構想は頓挫してしまったのであろうか。大々的に伝えられた情報ならば、地域住民の注目も、当然集まったに違いない。それなのになぜ、「アジアタウン構想」は、長田区の地域住民に広く浸透せず、「頓挫」という結末を迎えることとなってしまうのだろうか。それには、「マイノリティの集住地域」として、長田の町が歴史の中に抱えてきた、様々な問題が起因していた。長田の復興の一翼を担うはずの構想が、長田の過去から現在にかけての複雑な問題を露呈することとなったのである。以下では、「アジアタウン構想」を挫折させる要素になったと考えられる「長田の問題」を数点挙げ、構想に関係した人々、あるいは客観的な立場で構想を見ていた人々へのヒアリング結果を踏まえながら、国籍や出自を異にする人々の「共生」を阻害する地域社会の姿勢やその解決策を考察したい。

「日本人」たちの治安悪化への懸念

長田は、神戸市の中心街と郊外の間地点とも言える位置にあり、商業地域としてはそれほど発展していない。古い商店街が数多く残り、「下町」の様相を見せているが、あくまで地域住民や地域の工場で働く人々の生活に根ざした商業展開のみに留まっている。ゆえに、「買い物やアミューズメント目的で、外から多くの人が集まる」という経験を、長田の町やその地に暮らす人々は、未だにしたことがない。

「アジアタウン構想」の問題のひとつは、「長田に、(神戸の観光名所である)元町の“南京町”エリアのような、異国情緒あふれる商業地域をつくる」という一部の情報が独り歩きした点である。「アジアタウン構想」に関わる人々は、計画を、商業によるまちづくりと経済発展を目的としたものではなく、文化や生活のレベルで他民族共生のはかれるようなまちづくりを目指すものと位置づけていた。しかし、一部の情報を住民たちがうのみにしたことで、彼らの間に、長田の商業地域化への不安が生じ、さらに、詳しい情報が伝達されなかったことにより、その不安は増幅される形となった。

長田が「アジアタウン」のキャッチフレーズのもとに商業地域化することで、商業目的や観光目的で、多くの「アジア人」が集まってくる。「アジアタウン」...活気はあるが、猥雑で、犯罪の温床になりそうな印象の町。もしも長田が、新宿・歌舞伎町のような、外国人犯罪の多発する「アジアタウン」と化せば、住民の日常生活は脅かされ、町のイメージもダウンするだろう。地域住民の「不安」を端的に表現すれば、このようになる。

長田の地に暮らす人々は、何かと自分たちの町を「柄の悪い町やで」と揶揄する。それは、他地域の人々による差別的なまなざしへの反発心の表れであり、また、そのような差別的感情に共に耐えてきた人々が、助け合い支えあっている町への、愛着心の表れでもある。在日コリアンや同和地区の人々が、ゴム工業や靴産業を通して町の経済を支えてきた。現在ではコリアン以外にも、ベトナム人やブラジル人など、戦後に日本に渡ってきた外国人移民を多く受け入れている町である。高度経済成長期以降、地場産業であるケミカルシューズ工業は斜陽産業となり、商店街の活気も薄れた。「古びた工場町」「スラムのあった

町」「外国人の多い町」「地震で甚大な被害を受けた町」...長田の町をつくってきた様々な要素が、マイナスイメージを持って語られているのを、地元の人々は承知であるし、慣れてもいる。しかし、「愛する町の印象がこれ以上悪くなるのは御免蒙りたい」というのも、彼らの本音であろう。

「アジア」は汚い？

「アジアタウン構想」において障壁となっていたのは、そんな地元住民の「アジア」に対するイメージであった。これがもしも欧米風の町並みづくりなら、住民の反感は果たして大きくなったであろうか。「アジア」という言葉の中に彼らは、雑多、汚い、統一感がない、貧しいなどのマイナスイメージを覚えていた。それは長田に限ったことではなく、「これからはアジアの時代である、という『先見の明』を持った人」(A氏)すなわち一部の学識者やアジアに関心を寄せる人々でなければ、大抵の人が一般的に抱きうるイメージであるかもしれない。地元の人々は、「ごちゃごちゃした下町」「柄の悪い町」などと自分たちの住む町を揶揄しながら、一方で親しみあふれ、地域住民の間の絆の強い長田の町を愛している。愛する町が「アジア」のイメージ＝「汚い」色に染め上げられることを、彼らは憂いたのだろう。

似たような例が、同じく在日コリアンの集住地域であり、現在、「国際都市」としてのイメージアップを狙った駅前再開発事業が行政主導で行われている、東京都荒川区・日暮里地区においても発生している。

町の主幹産業である製造業が低迷し、商店街の空き店舗も目立つ荒川区。そんな区の「顔」づくり、すなわち商業機能やターミナル機能を充実させ、外からの人間を集めることができる地域づくりをするべく、行政は日暮里の再開発事業を打ち出した。日暮里駅から三河島駅にかけてJR常磐線沿線は、明治期から在日コリアンの集住地域として知られている。再開発で駅ビルの中に吸収されることが決まっている駅前の商店街で、文具店を営むB氏は、幼い頃目にしていた日暮里の在日コリアンコミュニティの風景を、以下のように語っていた。

「あの辺(東日暮里3丁目周辺)にたくさん住んでた。朝鮮人の子どもは、とにかく喧嘩が強い。僕らには太刀打ちできないから、絶対朝鮮人に喧嘩を売っちゃだめだって言われてたね。彼らは、きょうだい同士でも殴る蹴るの激しい喧嘩をするの。でも、もっとすごいのは親。親子の関係が厳しい国なんだね。とにかく親が厳しいの。子どもが悪いことすると、もう、それはきょうだい喧嘩の比じゃなかったね。『泣き女』もいたね。日本は、葬式っていっても御馳走食べたりするでしょ。向こう(朝鮮)の人は、泣いたりわめいたりするんだね。で、そのための“さくら”みたいな人をわざわざ雇うの。それが泣き女。今は(在日の)2世3世が中心でしょう。だからほとんど日本の文化になっちゃったのかな。そういう風景は見なくなったね」(*3)

しかし、近年、駅前に朝鮮料理店や朝鮮物産店が多く軒を連ね、沿線の「コリアタウン」

化が進行している。また、商店街の空き店舗が、次々とニューカマー向けの料理店、物産店、あるいは日本語学校に変わっている。それは近年、韓国からの「ニューカマー」の移住が進んでいるのが原因である。韓国以外のアジア各地からの移住も進行し、町中に多国籍な商店や多国籍の人々が頻繁に見受けられる「アジアタウン」の様相が、近年の日暮里ではうかがえるようになった。

そんな日暮里の地域特質に目をつけた行政が、これを荒川区の「売り」にできないだろうかと考えた。京成電鉄の工事を進め、成田空港と日暮里を1時間以内で結び付ける。日暮里の駅を国際的なターミナルにし、駅前を観光客で賑わせたい。そんな行政の「押し寄せ・国際化」ムードに、地元の住民はいささか戸惑いを隠せない。

また、日暮里駅前の別の店主は、「うちの商店街の空店舗にも、新しい人（ニューカマーの韓国・朝鮮人）を対象にした料理屋さんとか、雑貨屋さん、日本語学校が増えてるんですよ。お店の人がみんな韓国語を話せて、表記もハングルでされてるお店。日本語学校はまた今度新しくできるみたい。すごく増えてますよ。うちだけじゃないんじゃないかな。もともと焼肉屋やパチンコ屋なんかは多かったけど、最近特に増えてる。朝鮮の人は親戚を重んじるから、日本に親戚やその知り合いがいたら、それを頼って次々にみんな日本にやってきて、一緒に町で暮らすようになるんですよ。うちに来るお客さんも、最近は新しい人が増えたね」（*4）と、新たな客の増加や商店街の再活性化に期待をする半面、「治安の悪化が不安」との声も漏らしている。地域の多国籍化が進行すると、文化の違いや習慣の違いから、日常生活レベルでのトラブルの増加を余儀なくされる。「ゴミを決められた日以外に、勝手に人の店の前に捨てていく、とか…。言葉が通じないから、何度言っても、難しくてね」と彼らは語る。戦前から日暮里に暮らすオールドカマーの在日コリアンたちとは、時にぶつかりながらもうまく共生をはかれてきた。しかし、労働や学問のためだけに一時的な移住をしているニューカマーの人々は、地元コミュニティになじもうとせず、自分たちだけのコミュニティを作り上げているようだ。そのため、協力して地域社会をつくってゆけるのだろうか。そんな不安があると、彼は語っている。「日暮里の国際化」に対し、地元の人々が足踏みしているのは、日暮里の「閉鎖性」にも起因しているようである。別の店主はこう語る。「交通が至便である割に治安が良い。そこが日暮里の良いところであったから、住民は長年、日暮里の発展を望まなかった。このままでいい、開発は必要ないと考えていたから。しかし、町の景気の悪化でそうはいかなくなって、やっと対策に踏み切った」（*5）

「治安が悪化するから」という理由で、地元住民はニューカマーを恐れているようである。古くから日暮里に暮らす層を中心に、「国際化」への極端な反発心を見せる地元店主たちもいる。「最近の日暮里は外国のようだ」とぼやく人、また「（コリアカラーに）侵食されている」と感じる地元の人もある。彼らの知っている在日コリアンたちは、「日本で生まれ育ち、日本の文化を身につけたコリアン」のみであり、ゆえに、他国でもなお自国の文化の中のみ生きようとするニューカマーたちに、彼らのように「日本に適應する」こ

とを期待しているのかもしれない。

しかし、長田の「アジアタウン構想」の頓挫は、そうした治安の悪化や「アジア」に対するイメージへの懸念のみから引き起こされたものであったのだろうか。次節では、実際に「アジアタウン構想」に関わった人々、特に、愛する長田の町とマイノリティの将来に大きな望みを賭けて活動に奔走した、「長田生まれ・長田育ち」の在日コリアンたちへのヒアリングを中心に、「アジアタウン構想」にまつわる当時の出来事、構想に賭けた彼らの思い、周囲の住民の反応、そして、それらから浮かび上がる「マイノリティがまちづくりに関わることの難しさ」を、長田の歴史的背景とも併せて考察してゆきたい。

注：

(* 1) 日本一の在日コリアン集住地区として知られる大阪市生野区に位置する。生野区の在日韓国・朝鮮人の人口は、34950人(平成13年3月31日現在)。鶴橋は東成区や天王寺区とも隣接している。

(* 2) 2003年11月11日実施 Hさんへのヒアリングによる。

(* 3) 2002年9月14日実施 B氏へのヒアリングによる。

(* 4) 2002年9月実施 日暮里の店主L氏へのヒアリングによる。

(* 5) 2002年9月実施 日暮里の店主M氏へのヒアリングによる。

第2節 浮き彫りになった「多民族共生」への課題

地元の人々の関心と協力は...

「アジアタウン構想」のことについて長田区役所まちづくり推進課に問い合わせたところ、職員の方は皆「詳しいことはわからないのですが...」と困惑していた。紹介されて行った先は、「シューズプラザ」内にある「神戸アジア交流プラザ」であった。

「神戸アジア交流プラザ」が設立されたいきさつと、同施設をめぐる起きた様々な出来事について、現在入居している団体の代表の方に詳しく伺うことができた。

現在、「神戸アジア交流プラザ」に入居しているのは、Kというボランティア団体である。神戸で20年以上にもわたって国際交流や留学生支援のボランティアを行ってきた団体であるが、長田での活動を始めたのは、今年6月になってからであった。

「元々ここは、『アジアタウン構想』を受けて、長田区で活動するボランティア団体が地元で根ざした活動ができるように、雑居スペースとして提供していた場所だそうです。でも、結局ここに定着するボランティア団体が現れず、神戸市は『神戸国際協力センター』という県の外郭団体にここでの運営を要請したそうなんです。そこもつぶれてしまって、市内のボランティア団体に、部屋を貸します、ということで市がここを提供した。私どもは神戸YMCAを拠点に、それまで、神戸の東部（中央区・灘区・東灘区）を中心に活動していたのですが、YMCAの財政難で別の事務所を探さなくてはならなくなったんですね。それで、長田とは今までつながりがなかったんですが、場所を提供して頂けるということでしたので、私どもの団体が今使わせて頂いている状態なんです」と、Kの代表である女性、Nさんは話した。

Nさんの話の通り、Kは今年に入るまで一切長田での活動を行っていなかった。「アジアタウン構想」についても、神戸アジア交流プラザに入居してから初めて知ったとのことである。「外から来た身ですので、あくまで客観的にしか意見を言えないのですが」と前置きをして、Nさんは、震災後から現在にかけての現在の長田区におけるボランティア団体による在日外国人支援活動や、それに対する地元住民の反応について、次のような感想を述べた。

「地元で定着しきれてない、というのはすごく感じますね。震災直後の活動を見ていた感じですか、ここ（長田）に来てからの地元の方々の話を聞いた範囲でしか知らないんですが...。このスペースが有効に活用されなかったのもそうですし、あすこの長田の（鷹取教会を拠点として活動していた、外国人支援のボランティア団体の諸活動について）団体さんは、『アジアタウンの実現』ということで、マスコミばかり向いた活動しかしていなかった。ずいぶん有名になったでしょう。あれは、冷静に見てましたね。あれでは、いつかだめになると。体裁を気にしすぎて、地元で密着した、地元の人のための活動を本当にできていたのかしら、という疑問は、同じボランティア団体として強く感じていました。地元の方の目線は冷やかだったんじゃないですか」

地元から「乖離」した活動 Nさんの指摘はその点にあった。確かに、鷹取教会や「FMわいわい」の名前、そしてそれらに携わる人々の活動は、震災後のマスコミ報道により、全国的に知れ渡った。しかし、その活動が、在住外国人のみに「閉じた」活動になってしまい、周辺の日本人住民の理解を取り付けられるものになっていなかったのではないかと、というのである。

「地元の理解をどうしても引き付けることができなかった」。確かに、「アジアタウン構想」の失敗のひとつとして、A氏はそのように話していた。FMわいわいのHさんも、「地域の人に番組の存在を浸透させることができなかった」と悔やむ。その結果、経営難に陥ったFMわいわいは、現在、組織の縮小・建て直しに取り掛かっている。責任を取り、Hさんは「わいわい」の活動の一切を降りた、と話す。

「外の人がいっぱい集まってくれたんですよ。あれほど全国からたくさんの方が長田にやってきて、アジアタウン構想に注目を、そして協力をしてくれた」。A氏は懐かしそうに語る。しかし、「外部」の温かい反応とは対照的に、地元の協力はそれほどには得られず、むしろ反発のほうが大きかった。それは、なぜだったのか。

「協調」か、「強調」か

地域が在住外国人のために何も協力してくれない、日本の法制度や行政の対応が足りない...そんな状態を打開すべく始められたのが、彼らのボランティア活動であったのだろう。

「アジアタウン」に関わった人々は、積極的にイベントも開催した。地域の注目を集めるためのことは、確かに実践してきたであろう。しかし、対外的なPR以上に、地域の協力を求める活動をする必要があるのではないだろうか。

K氏は、「地域の日本人がバリアを張っている。こっちが歩み寄ってくるまで待っているだけ。なぜなら、ここは“日本人の国”だから、あなたたちは、外国人がそれに合わせるのが当然、と考えている。こっちが日本人の社会に合わせなければいけないのか。日本人社会には、自分たちがマジョリティであるから、マイノリティがそれに適応するのが当然、と考える『単一民族国家』思想が根強い。また、マイノリティ援護をしない行政の姿勢も、失敗をもたらした大きな原因なのではないか」と、現在の在住外国人を取り巻く日本社会を厳しく批判している。A氏も「私らは日本におっても外国に行っても、どこ行っても外国人ですわ。せやけど、ここの人（地域の日本人）は、ここにしか住んだことがない人がほとんどやから、“外国人として見られて差別される”ゆう経験をしてないねんな...。外国に行ったら苦勞するんちゃうかなーとは思うんやけど...」と、K氏同様、日本人のマイノリティに対する理解の浅さを指摘しているが、「理想は“共生”というかたちであるけれども、この活動で、そういう日本人の“単一民族思想”を変えたかったんですよ」と、地域の日本人の意識変革に力点を置いていたK氏に対し、A氏は「ふるさとが寂れてゆくのを、見たくなかったんですね。その思いだけですわ。（中略）ケミカルシューズに次ぐ新しい産

業を長田で生み出したかった。日本人とか、外国人とか、関係ない。コリアンの私だけがええ思いをするとか、誰かだけがええ思いをすとかやなしに、長田の人間としてそれがみんなと一緒にできればよかった。アジアタウンを生むことで、その中で 코리아タウンができてゆけばええね、という話やったんです」と、あくまで「長田の産業復興」と「共生」を重きに置いていた点で、両者の思惑は異なっていたように見える。

K氏は、「在日2世、3世たちの立場はすごく複雑で、日本に生まれて日本に育った、という『マジョリティ』の意識と、コリアンとしての『マイノリティ』の意識が混在してるんですね」と話しており、ボランティア活動の中でも、要求を次々に訴える外国人たちや、それを擁護して同様に要求する人々への反発と、差別や偏見を持った、マイノリティへの理解の足りない日本人への反発の両方を感じることがあるという。A氏の「どこへ行っても、外国人」という言葉や、在日コリアンたちが自嘲的に、あるいは仲間を揶揄して使う俗語である「パンジョッパリ」(半日本人)という言葉にも、在日コリアンの葛藤がにじみ出ている。「アジアタウン構想」をめぐるても、「地元の人々と協力しながら」という「協調」の姿勢と、「自分たちの民族的アイデンティティを強く主張してゆけるまちを創りたい」という「強調」の姿勢、その2つのジレンマで、コリアンたちは揺れに揺れていたに違いない。

そうしたコリアンたちの姿勢に対する「地元日本人サイドのこぼれ話」があった。

「神戸市の(職員の)方とお話していると、皆さん(市の職員たち)が長田のボランティアの方々をひどく恐れているんですよ。理由を聞くと、『こっちの意見が言えない。怖くて、言えない』と、『こっちの要求が、どうして呑み込めないんだ』ということを強くおっしゃるみたいで。話を聞いていて感じるのは、(特に、外国人支援を積極的に行っている在日コリアンのボランティアたちが)『私らは外国人や、私らは被災者や、だから偉いんや、なんとかせんかい』という敵意を、地元の方に対してむき出しにされていたんじゃないかと。協力するボランティアたちに対しても、『なんでこっち(外国人)の言うことを理解できひんのか。なんで指示した通りのことをお前らはちゃんとやってくれへんねん』と強くおっしゃったりして、それで人が離れていった...ということも、地元の方々からお聞きしたりしましたよ」(Nさん)

「反発」の本当の理由は

Nさんの話は続く。

「まちづくりの集まりでいろいろ地元の方にもお話をお伺いしましたが、やはり同じような感じで、いろいろ人間関係でもめた、ということもお聞きしたんですが...」

ボランティア活動に際し、地元住民とボランティアの衝突や和解、またボランティア同士の対立や人間関係のこじれは、震災後、長田だけでなく様々な地域であったことであろう。

「アジアタウン構想」に関して、「人間関係のこじれが頓挫の原因である」という言葉は、ヒアリングを進めながら様々なところで聞かれた。しかし、構想に関わった在日コリアン

を中心とする「当事者」たちの口からは、やはり詳しい事情を話すことははばかられたようであった。

「どうですか。大変でしょう。なかなかね、表と裏との顔がある、というか...」(A氏)

ここで参考までに、鷹取教会のJ氏の話を手挙げてみたい。鷹取教会は震災後、長田における在住外国人支援ボランティアの拠点として全国的に知られた。J氏は同教会の神父であり、K氏とともにボランティア活動の中心的人物として活動した。工場再建に専念するA氏から「アジアタウン推進協議会」の代表を引き継いだ人物でもある。残念ながら、「多忙である」という理由で、彼から直接お話を伺うことはできなかった。しかし、「アジアタウン構想」をめぐる諸々の問題についてJ氏が述べた言葉がインターネットのサイトに残っていたため、ここに抜粋させて頂きたいと思う。

「...名前だけ残って活動はしていませんが、神戸アジアタウン推進協議会があります。これは新長田の北側の細田地区あたりの区画整理の事業のなかで、まちをつくっていくのなら、こんどはここは「アジアのまち」だということでした。もともとここは在日外国人の人が多い町でした。だから最初はコリアのまちをつくらうという思いは、震災前からあったようですが、震災があってコリアタウンをつくらうという動きがあったのですが、ここはコリアだけではない、中国人もベトナム人もたくさんいるし、実は28ヶ国の人がいるのです。だから震災後に名前が一つ進展して、コリアではなくアジアということになった。コリアにすると、こんどは北朝鮮とも問題もあります。それも乗り越えるためにアジアになって、アジアタウンをつくらうとなりました。そこを開発するまちづくりをねらって、神戸アジアタウン推進協議会を立ち上げて、住民もいっしょになって始まったのですが、ちょっとした人間関係からうまくいかなくなってしまうました。当初は水笠公園のあたりを半年ほど借り切って、そこにアジアバザールをつくって、食べ物やいろいろな物資を売って、外国の人たちが生活する基盤づくりと、アジアの文化を伝える基盤づくりをしようとしてました。それも半年計画であるていど進んでいたのですが、周辺住民の反対にあい、その調整がうまくいかなくて、2日だけのイベントで終わってしまいました。結局そこがアジアタウンの拠点になることができなくなってしまうました。こちらで韓国やベトナムの人たちへの支援活動をするなかで、救援活動はいつまでが救援なのかという問題があります。だから、そこから日常へと進みます。アジアタウンをつくるというのは、自分たちの活動の次のステップへいけるのではないかという思いもあって、アジアタウンへの思いは、新長田の北での動きを、こんどは鷹取へもってきました。そこで少し違ったかたちで、まちの多言語の看板づくりとか、情報を多言語で提供していくという少し質の違う活動が続けられていきました。...」(2001年12月11日開催・「市民セミナー寺子屋」の講演記録 (<http://www.pure.ne.jp/~ngo/terakoya/2001shiminbo/05kanda.html>) より)

A氏やK氏、またJ氏は、「地元住民」とのトラブルについて触れていた。まちづくりに関して、地元の「日本人」住民たちと話し合いの場を設けることもしばしばあったという。

Nさんの話には、そんな地元の「日本人」住民サイドの意見が端的に表れている。ボランティアたちが「外国人の権利」を訴える。「アジアタウンの実現」を外部にばかり発信し、地元住民の関心や協力を得られなかった、など…。

しかし、日本人はあくまで核心に触れた言葉は発さない。在日コリアンたちは、その「決定的な一言」に、薄々勘付いていた。

「結局、“コリア”なんですよ」とA氏は語る。

「“アジア”言うてもやっぱり、コリアちゃうか、と。(長田における在日コリアン集住の)歴史は長いですし、たくさん(長田には)住んでますからね、面と向かって(コリアンに対する差別の言葉を口にする)日本人はもうおりませんよ。まったく、おりませんわ。せやけど、心の中でね、やっぱり、あるんでしょ。あの人は朝鮮人のくせに、ゆう気持ちかね。すごく、今回のこと(アジアタウン)でそれを感じて…辛かったですよ」

地元住民による反発の最大の理由が、「アジアタウン構想」の舵取り役が長田の在日コリアン住民たちだったことにあり、彼らは考えていた。

植民地政策による収奪や貧しい生活から逃れるために、彼らの先祖たちが日本へ渡ってきた時から、長田の町において、地元の日本人たちによるコリアンへの差別と偏見の歴史は始まっていた。地場産業を支える重要な存在として、また、商業面や文化面においても、町に活気を与える存在として、長田におけるコリアンの存在は無視できない。しかし、それでも差別や偏見の感情は脈々とこの町にも受け継がれ続けている。

「一緒くたにされたくない」。地元住民によるのか、インターネット上で長田の地域情報を提供する匿名掲示板には、コリアンを始めとした在住外国人に対する不満を露にした書き込みが散見される。化学工業で単純労働に就くことのできる工場町・長田は、現在はアジア系移民の集まる、そして戦前は、コリアンたちや沖縄・奄美大島からの貧しい移民が集まる町であった。

「内地人労働者が必死の力をこめてなだれおちかかる失業と、労働条件の低落を根かぎり精かぎりに防止しているとき、おりもおり、ときもときノッコリノッコリ低廉な労銀の所有者であり、原始的な労働者である鮮人の殺到することは、確実に内地人とのあいだに問題を惹起せずにはおかない必然の危険を包蔵していた。また一方不況によって生活の根底をグラグラゆられながらようやく生計をいとなんでいる先住鮮人とのあいだにも、同時にやかましい問題をまきおこさずにはおかない運命をもっていた」(下中邦彦 1960 p. 164 - 165 神戸市役所社会課『在神半島民族の現状』より抜粋)

「いまでも、長田の町にふるくから住んでいる内地生まれの人の中には、奄美の人の話になると、『あの人は、結局、朝鮮人とおなじやないの。食べるもんなんかも似とるよ』というようなことを、さすがにちょっと声をひそめていう人がある。『あの人は奄美の出やそうやね、道理で...』ということで、何かが納得されるような空気はかなり一般的に存在しているといってよい。『今度うちの貼り場にきたあの娘、この前いっしょに来たとき、財布忘れとったんでちょっと出しといてもらたのや、仕事しもて帰ろうとしたら、ちゃん

と催促するやないの、へえーと思うてたら、なんや奄美の出やてな』『二階の東の貼り場の子、ロール場のAとつろて行きよったで。Aは、あれ、済州島やろが、ははあんと思うとったら、あの子もやっぱり大島やで』仕事のひまをぬすんで、二十円の安コーヒーを飲みにくるゴム工場の女工さんたちが、近所の喫茶店でかわしていた会話である。言葉のうへの軽蔑感とはうらはらに、彼女たちの目には不安の色があった。自分たちの領分にわりこんできた新参者の、たくましい生活力にたいするおそれがあった」(下中邦彦『日本残酷物語現代篇1』平凡社 1960 P.169)

マイノリティたちのバイタリティに、地元の住民は圧倒されてきた。その歴史は、上記の文献の記述や、アジアタウン構想に対する住民の反応を見ても、変わらずに続いているのではないだろうか。刺激を受けつつも、自分たちの町や生活が彼らに「侵食」されるのではないかという恐れを、地元の人々は抱いていたのではないか。「(コリアカラーに)侵食されている」と感じる、と地元の人が話していた、先述の「日暮里のコリアタウン化」にも共通したものが伺える。「アジアタウン」への反発にも、そうした思いが伺える。「自分たちの町が外国人の色に染められる。外国人が進出して来る」という不安に加えた、「どうして彼らにまちづくりのリーダーシップを取らせられよう」という、「地元の日本人」としての“優越感”が、反発心を煽ったのではないか。

「コリアンの集住地域」「同和地区の存在する地域」「貧しい移住民の寄り集まる町」「景気の衰退した、古い工場町」...様々なマイナスイメージを抱かれ、長田は神戸の他地域から差別され続けてきた。差別は差別を生み出す。そして長田の日本人住民の不満の矛先は、在日コリアンたちを始めとする移民たちや、同和地区へと向かっていったのである。「自分たちの町が彼らによって悪いイメージに染められている」という理由づけと、「いつ彼らに出し抜かれてしまうのだろうか」という焦りが入り混じった、複雑で鬱屈した差別感情。その歴史が、震災後の「アジアタウン構想」を巡り、一気に噴出したと考えられる。

「あの時」を振り返って

「アジアタウン構想」に関わっていたOさんは、活動に関わっていた時期のことについて、多くを語ろうとしなかった。「あの時起こったことを、自分でもう一度整理して語ろうとすると...、自分の頑張ってきたこと、自分が今まで目指して、夢見てきたこととか、それに加えて、自分の存在自体をすべて否定してしまうような、そんな気がするんですね。当事者の心の傷っていうのかな...、そんなんがやっぱりあって、ものすごく、(語ることが)難しい。どこまで話したらいいのかも分からない。(聞き手に対して)これから長田の研究をされるってことですから、今僕があの時あったこと、今の長田のことをしゃべってしまったら、あなたは失望してこの研究をやめてしまうかもしれない、それくらい(現状は厳しく、先行きは暗い)。あなたにはこの研究を続けてほしいから、今は語れない」彼の言葉から、彼に起こった当時の出来事や彼自身の気持ちのすべてを察することは難しいが、ただ、多民族共生のための「アジアタウン」づくりが、長田のコリアンたちにとつ

て大きな希望であり、夢であったことは確かであろう。

「みんなが自分の周りの復興で手一杯やった。それで、マイノリティ支援への目が行かなかったんです」と、Hさんは語る。長田は元々商売人や工夫の町で、文教地区と異なり、ボランティアや外国人支援といったものへの関心が薄いというのである。しかし、これは長田でボランティアに携わる人々の口から幾度となく発された言葉であり、ボランティアたちに共通の認識があったように思われる。「下町人情」の町で、なぜに「助け合い」のボランティアが浸透しなかったか。近隣住民との助け合いは他のどの区よりもなされていた町である。「仕方がないことですよ。商売が、工場が再建できなかった人がいっぱいいる。その中で、なんで外国人支援などせなあかんのか。それが本音ですよ」

「アジアタウン構想は、まだ終わっていません」とK氏はきっぱり言った。

K氏の主宰するボランティア団体をはじめ、鷹取教会をベースとして震災後より活動する在住外国人支援のボランティア団体は、地域の在住外国人の生活に根ざした地道な活動を行っている。K氏は、『『アジアタウン構想』は終わってしまったのではなく、まだ続いているんです。その構想を支える拠点として「シューズプラザ」や「アジアギャザリー」を作る、という、事業としての大規模な計画は失敗に終わってしまった。でも、今後自分たちの活動が草の根のように広がって、在住外国人が暮らしやすい長田の町を少しずつ作ってゆきたい。そのコミュニティを充実させてゆくのが目標なんです」と彼は話した。

「アジアタウン構想」とそれを巡る一連の人々の活動が、長田に残したものは何だったのだろうか。構想を妨げていたのは、本当に、「外国人に対する地元住民や行政の差別意識」のみに尽きただろうか。この問題を調べながら私は、「マイノリティ側の心の壁」をも感じずにはいられなかった。この構想で最も難しく、乗り越えなければならなかった最大の問題は、両者の、両者に対する「差別意識」だったのではないだろうか。この見解は、最終章で詳しく述べていきたい。

終章 都市形成過程におけるマイノリティ・コミュニティの役割

マイノリティ・コミュニティに対する信頼のもろさ

根っこに「差別意識」があるために、地元の日本人は、ちょっとしたきっかけからマイノリティたちへの信頼を失いがちである。その構造は、「朝鮮人が暴動を起こす」などとデマが流れたために朝鮮人たちへの虐殺が行われた、関東大震災の時から変わっていない。「いつ襲われるだろう、いつ殺されるだろう」。以来、戦争や災害など非常事態が発生するたび、彼らは、日本人によって突然攻撃されまいかと、恐れをなした。

様々な立場の在日コリアン取材した野村進の『コリアン世界の旅』(講談社 1996)の中に、こんな一節がみられる。

「一個人にせよ集団にせよ、極限状態に置かれたとき、その本質的なところが突出してくるという。七十年あまり前の関東大震災では、『日韓併合』後、朝鮮半島を追われ日本に急増した朝鮮人に対する恐怖の感情が、おおもとの火種となった。日本があれだけ非道な仕打ちを加えた朝鮮の人々に仕返しをされるのではないかという、罪悪感や差別意識のこもった恐怖の感情である。それが、震災後の大混乱で一挙に噴き出し、最悪の形となって現れたのだった」(野村進 1996 p. 280)

阪神大震災の際も、在日コリアンたちの中には「関東大震災」の再来をひどく恐れた者もいた。しかし、デマや暴動は一切起こらなかった。地元の日本人と在日コリアンたちが、国籍を問わず、避難所や被災地で助け合った。「民族にかかわらず一緒に苦難を乗り越えることができ、以前より協力の輪が広がった、心の壁が薄くなった気がするんです」と、Hさんは語っている。ヒアリングでお会いした在日コリアンの人々も、皆口々に「震災の時は、地元の日本人たちとわかりあってお互いに助け合うことができた」と、その時の喜びを語っている。G氏は「もし(関東大震災の時のような)そういうことがあったとしたら、私たちがこの五十年間、地域の住民として日本人の人々と培ってきた日々の交流は何だったのかを自問しなければならないだろう」(*1)とし、「長田においても日本人、韓国・朝鮮人の区別など全くなく、お互いに協力して倒壊した家屋から隣人たちを助け出したり、食料を分けあっていて... (中略) 少なくともいま、『在日』は関東大震災の呪縛からはようやく解き放されたと思う」(*2)という意見を、震災直後の雑誌に寄稿している。

ところが、その連帯を一瞬にして突き崩したのが、2002年に浮かび上がった一連の北朝鮮による「拉致事件」である。拉致された日本人被害者の一人とされている有本恵子さんは、神戸市長田区出身であり、家族は現在でも長田区内に暮らしている。その影響で、長田の日本人住民の在日コリアンに対する態度は一変した。

「震災の時の助け合いの記憶は、何やったんでしょ」と、F氏は嘆いた。F氏は、北朝鮮系の民族団体、在日本朝鮮人総連合会(朝鮮総連)の役員である。「地元の住民としての

つながりより、マスコミの報道に心が動かされた。今まで町で会ってもごく普通にあいさつしてくれとった人らが、あれ（拉致事件の報道）以来、会っても目も合わさず、一言のあいさつもなくなった。地元の人のために定期的に朝鮮学校で開いたバザーにも、めっきり人が来なくなった。こんなにも態度が変わってしまうものなのかと、悲しいです。地元の人たちの心が一気に遠くなってしまった気がします」

F氏のこの言葉が、地元マジョリティによる、マイノリティへの信頼の「もろさ」を端的に表していた。「外国人に対する不信感があったんでしょね。結局、任せてもらえなかった」と、「アジアタウン構想」の頓挫に関し、Hさんが語った言葉が脳裏に蘇った。

「民族」が問題か、「人間」が問題か

長田には朝鮮総連の西神戸支部の他にも、朝鮮学校（西神戸朝鮮初中級学校）があり、北朝鮮にゆかりのある人々が多い。しかし、地元住民の間に、「あの人は朝鮮籍」「あの人は韓国籍」といった、地元のコリアンに対する細かい意識や、それによる対応の違いが果たしてあるといえるのだろうか。朝鮮籍、韓国籍を問わず、「在日コリアン」として長田に生きる人々の多くが、最近、F氏と似たような地元住民の対応を受けることが多くなっているのではないかと危惧している。そのまなざしはまるで、犯罪者の家族に向けられたものと同じなのではないだろうか。「同じ国から出てきたものだから、同じ『誘拐犯』、『犯罪者』の匂いがする。だから、コリアンを差別する」。長田の町で現在起こっているのは、そうした偏見から来る大々的な差別なのではないだろうか。極端な言い方をすれば、「あの人も朝鮮人やから、拉致をするかもしれんし、核爆弾を投げて攻撃して来るかも知れん」という、ある事件に関連させた「ひと括りの差別意識」である。

このことは、マジョリティ意識とマイノリティ意識の関係にもつながりがある。自分自身の立場を「マジョリティ」「マイノリティ」とカテゴライズさせた時、そこでは、各々の人間性や個性は完全に無視されている。集団を代表する性質を、その個人も持っているものとみなされる。

ここで正直に書かせて頂くと、私自身、長田の在日コリアンの人々に話を伺うため、まずは民族団体にアポイントメントを取ろうと思い、朝鮮総連の事務所の前まで足を運んだ時、一抹の不安が頭をよぎった。「朝鮮総連...北朝鮮...」マイノリティを研究したいと思っ

ていながら、マスコミの情報に踊らされている自分が悲しくなった。

ただ、ここで私の覚えた「不安」の最大要素は、「マスコミから種々のバッシングに遭っている故に、差別する側に立っている『日本人』である私の取材を断られてしまうのではないだろうか」といった気持ちであり、差別的な意識はなかったことをお断りしておきたい。私が恐れていたのは、もしも、事務所の方々が、私に対し「自分たちをバッシングする日本人を、こちらもバッシングしよう」という態度を取って、私を追い返すことがあったらどうしようかという「逆差別」であった。

「あなたはなに人ですか？」

自分自身の、マイノリティに対する浅はかな認識のために、ここでは名前を伏せさせて頂きたいのだが、とある調査先の在日コリアンの方からお叱りを頂いたことがあった。

「“外国人の気持ちなど、日本人にわかるはずがない”と、在日コリアンの人々が、周辺住民に対してバリアを張っていた、ということは、考えられませんか？」私のこの不用意な質問が、彼を不快にさせてしまったのである。

「心外です。バリアを張っているのは、あなたたちのほう。こっちが歩み寄ってくるまで待っているだけ。なぜなら、ここは“日本人の国”だから、あなたたちは、外国人がそれに合わせるのが当然、と考えている。こっちがあなたたちの社会に合わせなきゃいけないのですか？ 日本人社会は、いつだってそう。自分たちがマジョリティ。だからマイノリティがそれに適応するのが当然、と考える。それが単一民族意識だ。あなたの考え方も同じだ。だいいち、あなたは何が分かってこのマイノリティの問題をやろうとしているの？ 人に聞く前にあなたはどうなの？ あなたは、なぜ自分が『日本人』であるのか、考えたことがあるの？ 何を根拠に、あなたは自分を『日本人』と、マジョリティであると考えているのですか？」

彼の猛然とした問いかけに、私は言葉を失ってしまった。

そして、彼は席を立ってしまった。話をこれ以上聞くことは、その時はできなかった。

私は茫然とした。「マジョリティ（日本人社会）の中で頑張るマイノリティたち」。当初、私が論文の中に描こうとしていたのは、所詮そんなきれいごとであった。その構図がいかにか自己中心であったか、私は彼の言葉によって初めて思い知らされた。

指摘された通りであった。私は、マイノリティの立場を、何もわからずにこの論文の執筆を始めようとしていたのである。しかし、そうしたら、私はどうすればよいのだろうか。自分が「マジョリティ」である以上、自分にはもうこのテーマで執筆することは不可能なのだろうか。私は途方に暮れた。執筆を、調査をこれから先進めてゆく自信を失くしてしまった。

自分自身がどのような立場でこの論文を書いてゆくべきなのか、私はほとんど意識していなかった。それは私が、当たり前のように「マジョリティ」の立場から執筆を進めようとしていたこと、そしてそのことに何の罪の意識も抱いていなかったことが原因である。日本という国家が、日本人という民族を中心に動き、日本人という民族を中心に社会が形成されているのだということを、何の疑いもなく信じていた。それが、彼の指摘した「日本人の、強い“単一民族意識”」だったのであろう。その“単一民族意識”が在住外国人を日本の中で生き辛くしているのであり、日本人との共生を妨げていたのである。

それと同時に、ヒアリングに際し、私は「今から、“在日の人”に会って来る」との意識が強かった。その言葉にはまさに「こっちの世界」から「あっちの世界」へ行く、といったニュアンスが含まれていた。私は、「マイノリティ・コミュニティの役割」について考察することを標榜しながら、自分自身の心の中に「見えない壁」を作っていたのである。

「自分は日本人、向こうは外国人」と、会う相手をカテゴリーの中に押し込めていたのである。

彼の態度や言葉を、私は当初、あまりのショックから「逆差別」ととらえた。差別されているからこそ、差別する相手を自分自身も差別する。「単一民族意識の持ち主」という言葉が私の心に突き刺さった。その記憶が、今回、事務所に行く際にまざまざと蘇ってきたのである。同じように「自分たちを差別する日本人がやってきたぞ、さあ、どうする？」と身構えられてしまったら、どうしようかと思ひ悩んだのである。

しかし、私はあの日のヒアリングを機に、違った態度で調査に臨むことが少しずつできるようになっていた。コリアンの人々ひとりひとりと親交を深めるにつれ、私の心の中で彼らに対する「在日の人」というカテゴリー意識が消え、一人一人を、それぞれ個性の違う人間として、無意識のうちにとらえるようになっていた。かつて友人に「うち、在日やねん」と打ち明けられても、別の国籍を有する、すなわち、私とは別のコミュニティの中にいるのだとは到底思うことができず、「国籍が違って、彼女は、私にとっての友達としての彼女だ」と自然にそれを受け止めていた、中学校時代の感覚が蘇った。

「壁」を乗り越えること

一度目は事務所に入りあぐねて、長田の町を一巡しながら考えた末、「民族は、問題ではない。人間として、きっと私を受け入れてくれるだろう。私も、人間としての彼らを信じる！」と決意して、事務所の門戸を叩いた。突然の訪問にも関わらず、私を温かく受け入れて下さったF氏とI氏をはじめ、事務所の方々に、私は深く感謝している。

「こんな風潮の中、よくぞここに来てくれはりましたね。入るのに、迷われましたか？ 怖かったですか？」その時にI氏が私に問いかけた言葉が、今でも忘れられない。

「入ってみたら、全然怖くなかったでしょう？ せやけど、私らも今、申し訳ないことに、あなたの取材を両手広げて喜んで受け入れることができないんですわ。それは昨今のマスコミなんかの私らに対する風当たりの強さから来てしまう『警戒心』のせいなんですけど、それでこんな、喜びたいのに慎重な態度になってしもうて、申し訳ないねえ」I氏の率直な言葉を聞くことができ、私は嬉しかった。

「壁」は、お互いにある。「差別する側」「差別される側」「差別する」「差別されるからこっちも向こうを差別する」...そういった感情を、自分自身を「民族」というカテゴリーに押し込めることで、人々が持っていることに、私は気がついた。

I氏は、マジョリティの側から「差別される」立場にある。私に対する警戒心は、事務所の前で訪問をためらっていた時、私がI氏らに抱いていた警戒心の比ではなかったであろう。しかし、I氏はその日の別れ際、その警戒心を振り払うように私にこう声をかけて下さった。「お互いの壁を取り払えるような、いい論文を書いてください。あなたの論文が、日本人たちに『コリアンの人ら、怖くないでえ』と、本当の長田のコリアンの姿を教えてくださいられるものになるよう、期待してますよ」

私はこの時、I氏からの「鶴山芳美という、ひとりの人間」に対するまなざしを感じた。それまで、私は「コリアンに対する差別意識を持っているかもしれない、ひとりの日本人」であったし、私にとってもI氏は「日本人を警戒するかもしれない、ひとりのコリアン」であった。そしてその意識が、「一人の人間が新たなコミュニティへ踏み込み、そのコミュニティとの融和をはかること」を妨げているのではないだろうかと考えた。コミュニティ間の融和を阻んでいる「壁」とはつまり、「相手の人間性を見ずに、所属カテゴリーで相手を判断する意識」のことを指すのではないだろうか、との認識に至ったのである。それが、今日の長田における問題として再び上がってきているのではないだろうか。

阪神大震災の時、緊急事態の中、長田の人々は民族の違いや所属コミュニティの違いを越えて互いに助け合った。そこには個々人として助け合おうという意思を持った「人間」がいるだけで、「あっちの人」「こっちの人」というカテゴリー意識は皆無になっていたのではないだろうか。その状態が現在でも続くことができれば、というのは少々乱暴に過ぎる見解ではあるかもしれないが、直接話し合った結果でもない、「マスコミ報道」による情報のみによって、地元日本人住民が「拉致による被害者＝日本人」のカテゴリーに閉じこもり、また在日コリアンの人々を「加害者」のカテゴリーに閉じ込めてしまったことは、残念で仕方ない。

「優攻される」恐怖

3章にわたり、「下層社会」としての長田の道のり、ケミカルシューズ産業の歴史、一連の「アジアタウン構想」を巡るすれ違いや衝突、また、拉致事件報道を受けた地元住民によるコリアンたちへの差別等を考察し、私は、マジョリティの差別意識が、「マイノリティに足元をすくわれる」、言い換えれば「自身の聖域を優攻される」恐怖感に類似した意識から生じているのではないかと推測した。

マジョリティ側の「優越感」に浸っているだけならば、差別は生じないはずである。ところが、自分たちより人数が少なく、経済的な力も劣り、圧倒的に不利な立場に立たされていながら、マイノリティたちが力をつけて這い上がろうとしてくる時、マジョリティたちは一斉に集中砲火を浴びせるのである。

拉致問題が日本中で騒ぎになった時、その不安の矛先が、隣人であり、今まで、度々衝突したり、差別したりされたりを繰り返しながらも、共に下町の生活と経済を築き上げてきた「在日コリアン」へと向かった。誘拐、スパイ、ヤミ送金...マスコミの北朝鮮に関する様々な情報が、多くの在日コリアンと共に長田で寄り集まって暮らす住民の不安を、一気に煽った。「自分たちの生活も実は、彼らによって侵されつつあるのではないだろうか...」そうした不安を、彼らは「差別」という形で解消しているのだろう。それは、長田の町に限らず、現在、朝鮮学校のチマ・チョゴリを傷つける日本人、在日コリアンへのいたづら電話をかける日本人、インターネットの匿名掲示板で延々とコリアンへの誹謗中傷を続ける日本人に代表されるように、あらゆる町で発生している「自己防衛のための差別」なの

である。

ケミカルシューズ産業は戦後、経営者の数の関係からコリアンたちがマジョリティ側に立つこととなった。そのため、ケミカルシューズ産業内での差別は少なかったはずであるし、コリアンたちもその環境を好んで仕事を続けて行ったに違いない。しかし、創成期の頃に日本人から多少の誹謗中傷を受けることがあったのは、恐らく「戦前は下っ端働きだった朝鮮人が、立派に会社を構え、地域産業を支えている」ことへの嫉妬ゆえであろう。

アジアタウン構想に対する地元住民の反発も、「人口の大多数が日本人の町なのに、『アジアの人』ばかりが住んでいるような印象を与える、“アジアタウン”なるキャッチフレーズを長田に与えるのはおかしい」という思いから生じたものであろう。「アジア」という言葉から連想するマイナスイメージも手伝った。在日コリアンの人々は、彼らの出自そのものに対する差別に耐え続けていたが、長田の町の人々もまた、「スラムがあり、悪臭漂うマッチャやゴム工場があり、外国人が多く…」という周辺地域の人々の差別や偏見に耐えてきたのであった。確かに、在日コリアンはケミカルシューズ産業を長田の一大地場産業へと育ててくれた大切な存在である。でも、彼らが長田の町で、「アジアタウン」を機に圧倒的な有力者になってしまうのはちょっと...という「本音」が、計画の不協和音のあちこちから見え隠れしているのだ。

ただ、「アジアタウン」の場合、「コリアンや外国人の権利を」と声高に訴える“急進派”の人もいれば、「日本人とコリアンが仲良く産業をやって、いずれコリアタウンを実現できればよかった」という“穏健派”の人もあり、コリアンたちの中でも立場や意見が割れてしまったことも、計画頓挫の一因となっていたであろう。

さらに、なぜにA氏から「孤軍奮闘やったんですよ」という言葉が出てきてしまったのか、その理由も考えたい。A氏は「コリアンの人々は皆、アジアタウンに賛成であったと主張したが、周辺の人々は、「靴メーカーがピラミッド型のヒエラルキー構造のトップにいるケミカルシューズ業界で、彼のような下請けの靴底業者がまちづくりを提案し、その中心になって活動していたことで、彼は業界の上層部から何らかの差別を受けていたのではないだろうか」と推測していた。A氏は、主に長田区内の大きな靴メーカーが所属する組合を、「あきらめて、業界の衰退を、指をくわえてみているだけ。自分たちの（工場の）復興に手一杯で、業界全体の改善のために、震災後から、積極的に動いた人はほとんどおらなかった。上の人たちに、そういう気持ちのある人が少しでもおったら…」と批判し、悔しそうな表情をしていたが、組合の人々がA氏らの動きを静観していただけであったというその背景には、靴メーカーの「下請け業者に足元をすくわれる」という危機感も作用していたのではないだろうか。

そのような、長きにわたって長田の町に蓄積されてきた、あらゆるコミュニティの力関係や利害関係が噴出したことが、結果として「アジアタウン」の失敗をもたらしたといえるだろう。その整理や再検討を促しているのもまた、「アジアタウン」の失敗なのではないだろうか。それぞれのコミュニティの者が、どこに妥協点を見つけ出し、歩み寄ることで、

「多民族共生」への理想像へ一歩近づいてゆけるのだろうか という課題を、人々は「放りっぱなしの宿題」の如く、長田の町に置き去りにして、それぞれの生活をまた粛々と営んでいる。その風景はまるで、「祭りのあと」であった。国籍の違う者、立場の違う者が、震災からの町の復興を祈り、大きく広げてみんなで楽しく喧しく夢を繰り広げた、しかし夢をかたちにすることができないまま、人々が去った、「シューズプラザ」「アジアギャラリー」という“屋台”を遺したまま。

「雑種が強い」

よく言われることには、血統書つきの犬は体質が虚弱で寿命もそれほど長くない、ということである。ところが雑種ともなると体質が格段と強くなり長生きもするようになる、という。町を犬に例えてしまうのは失礼極まりないと思うが、地域の活性化のためにも、「新しい血」は必ず必要になってくるはずであると、私は考える。「新しい血」とはすなわち、マイノリティ・コミュニティの存在のことを指す。長田という都市の形成過程において、「在日コリアン」というマイノリティ・コミュニティが、かつてその町に生まれ得なかった産業や進歩をもたらしたことが、その可能性を証明している。社会的に不利な立場に立たされ、差別や偏見、制裁に耐え続けてきたマイノリティ・コミュニティが、自らの生活と民族的アイデンティティの発揚のために、一念発起して都市に何らかの影響を与えるのである。その爆発的な力とたくましさ、かつてのケミカルシューズ産業の勃興を長田にもたらしたといえよう。そして震災後の「アジアタウン構想」もまた、その力とたくましさから生み出されたものであろう。個々の立場の保守と意見の食い違いから、今ではなりを潜めてしまっている、「理想的な多民族共生社会づくり」への動きであるが、ケミカルシューズ産業が国籍の壁を乗り越えて町を代表する一大産業となりえたように、いつか再びこのうねりが大きくなることを私は期待している。

長田の町の近年の活力低下は、高齢化の進行や地場産業の停滞がもたらしたものであった。新しい風が吹かなかつたのである。地場産業の牽引役として長田を支えてきたマイノリティ・コミュニティにおいても、後世のケミカルシューズ業界離れや長田離れが進んで、活気は澱んでゆく一方であった。「アジアタウン構想」によって、かつての「新しい血」であった在日コリアンコミュニティのような、在住外国人たちの活躍が促されてゆけば、永田の町に新たな活気が生み出されてゆくのではないだろうか。かつての自身の豊富な体験から、在日コリアンたちが地元の日本人とニューカマーの外国人たちとの「架け橋」になって活躍することも大いに可能であろう。

長田の町は、マイノリティ・コミュニティの集まった「雑種」である。下町に新しい風を吹きこむ今後のマイノリティ・コミュニティの地域における役割の可能性を提案して、この論文の執筆の締めくくりとさせていただきます。

なお、この場を借りて、お忙しい中ヒアリング調査にご協力して頂いた方々に、心から

深く御礼を申し上げたい。自分自身の「マジョリティ」と「マイノリティ」の間にある壁を、この方々に出会うことで打ち壊すことができたことは、私の精神的な成長を促す貴重な体験となった。

注：

(* 1 ・ 2) G氏の寄稿した記事(『AERA』1995年2月13日号 p . 2 1)より抜粋。

参考文献・ホームページ一覧

尹達世「関東大震災の呪縛から解放された」『AERA』1995年2月13日号
朝日新聞社

神戸ゴム工業協同組合『神戸ゴム工業協同組合史』1987

門野隆弘「工場も家も失ったケミカル業界」酒井道雄編『神戸発 阪神大震災』
岩波書店 1995

栗野仁雄『瓦礫の中の群像』東京経済 1995

呉圭祥『在日朝鮮人企業活動形成史』雄山閣 1992

香山永秀『かっぱ談義 けみかる年代記』1962

外国人地震情報センター『阪神大震災と外国人』明石書店 1996

長田区役所『ながたの歴史』1977

郭早苗『父・KOREA』長征社 1986

兵庫県ゴム工業協同組合・兵庫県工業会『兵庫県工業史』1978

朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成 第二巻』三一書房 1975

朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成 第三巻』三一書房 1976

日本ケミカルシューズ工業組合資料

杉之原寿一『第4巻・大都市部落の実証研究』兵庫部落問題研究所 1985

杉之原寿一『神戸市における同和行政の歩みと同和地区の実態の変化』

兵庫人権問題研究所 2003

神戸市『神戸市史 第三集 産業経済編』1967

兵庫朝鮮関係研究会『兵庫と朝鮮人』1985

神戸市役所社会課『在神半島民族の現状』1927

野坂昭如『火垂るの墓』新潮社 1972

韓哲曦『人生は七転八起 私の在日七十年』岩波書店 1997

野村進『コリアン世界の旅』講談社 1996

仲原良二『在日韓国・朝鮮人の就職差別と国籍条項』明石書店 1993

長田区役所資料

「日韓・日朝関係の正常化」ホームページ

<http://opinion.nucba.ac.jp/~kamada/H15Asia/Asia15-9.html>

「市民セミナー寺子屋」ホームページ

<http://www.pure.ne.jp/~ngo/terakoya/2001shiminbo/05kanda.html>

「朝銀って何？公的資金って何？」ホームページ

<http://chogin.perfait.ne.jp/history.html>

朝鮮新報社ホームページ

<http://www.korea-np.co.jp>

神戸アジアタウン推進協議会ホームページ

<http://www.tcc117.com/asiatown/>

F Mわいわいホームページ

<http://www.tcc117.com/fmyy/>

「あるまちづくりの現場を訪ねて（大阪外国語大学国際文化学科 森栗茂一ゼミ）」

<http://kobe.cool.ne.jp/nomurin/>

神戸市ホームページ

<http://www.city.kobe.jp/>

長田区役所ホームページ

<http://www.city.kobe.jp/cityoffice/86/>

「タウンながた」ホームページ

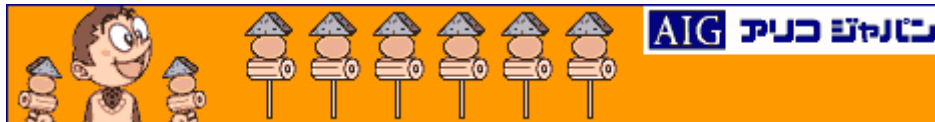
<http://i-town-nagata.com/>

別図 1 神戸市

<http://sc.msn.co.jp/24/MWE40NP3H1382B9LT-QC!.gif>

別図 2 (省略)

別図 3 (省略)



今すぐクリック！メリット多彩で断然お得な国際線割引チケット



トップ



地図から探す

見たい地域をクリック!

地図のトップ > 神戸市

- 地図検索
- ▶ 地図から探す
 - キーワードから探す
 - 住所
 - 駅名
 - 郵便番号

検索

路線・時刻表検索
出発駅 (例:東京)

目的駅 (例:横浜)

検索

地域別キャリア情報
(提供:インテリジェンス)

- ▶ 北海道・東北地区
- ▶ 関東地区
- ▶ 東海地区
- ▶ 関西地区
- ▶ 中国・九州地区

今日・明日の天気



降水確率: 20% (12-18)

▶ 週間予報



この地域の天気

▶ 神戸市の天気

関西地区のキャリア情報

(提供 インテリジェンス)



- ▶ [転職]正社員の求人はこちら
- ▶ [派遣]時給・職種で一発検索!
- ▶ [エンジニア派遣]

神戸市で探す結婚相手

(提供 サンマリエ)

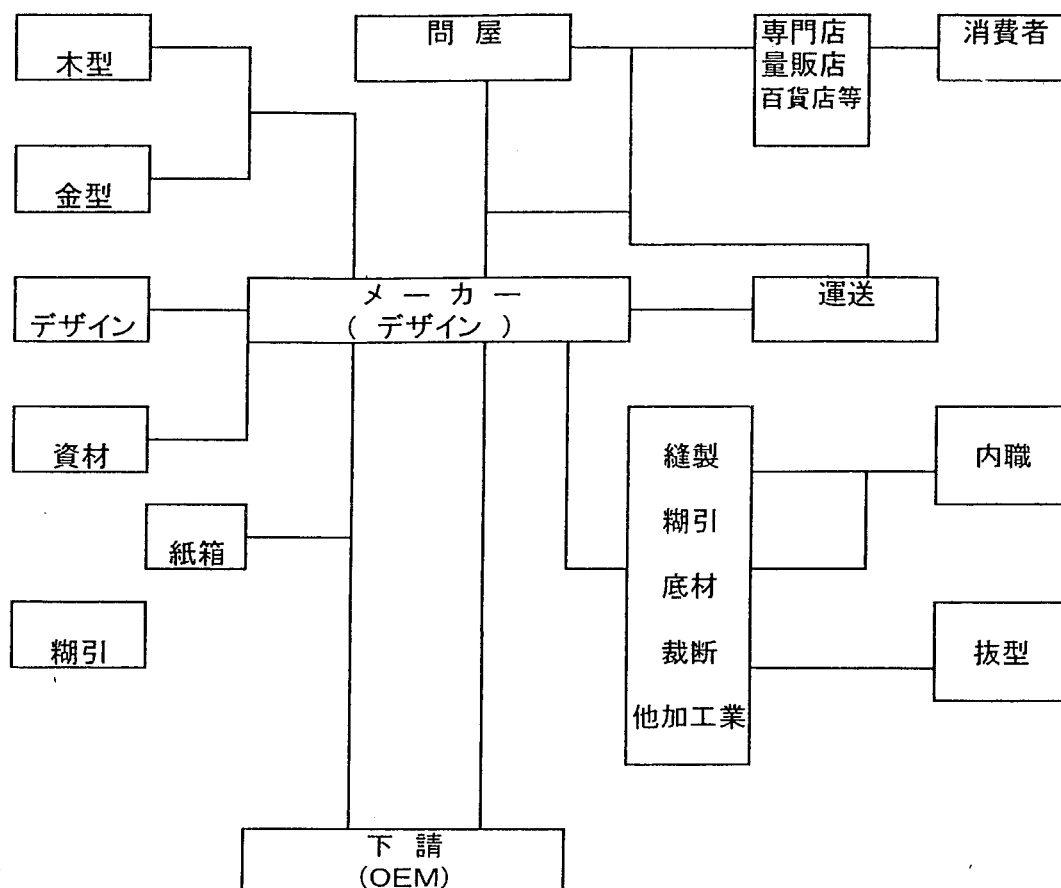


- ▶ こんな初めて!
- ▶ 出会いに保証をつけました。
- ▶ ただ今、キャンペーン実施中!

DIONのADSLで冬を楽しもう!
DION by KDDI
楽しく過ごそう
あなたの冬プラン
ADSL活用術を紹介!

家族のインターネット MSN プレミアムウェブサービス

別図4 ケミカルシューズ産業の内部構造



資料提供：日本ケミカルシューズ工業組合